

主要地方道 枚方・富田林・泉佐野線新設工事に伴う

木間池北方遺跡発掘調査概要

——四條畷市中野所在——



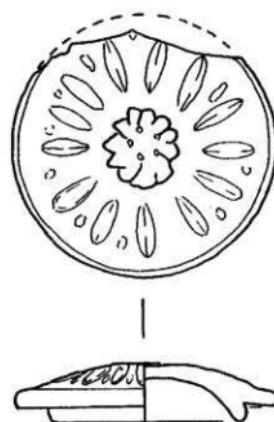
1997年3月

四條畷市教育委員会

主要地方道 枚方・富田林・泉佐野線新設工事に伴う

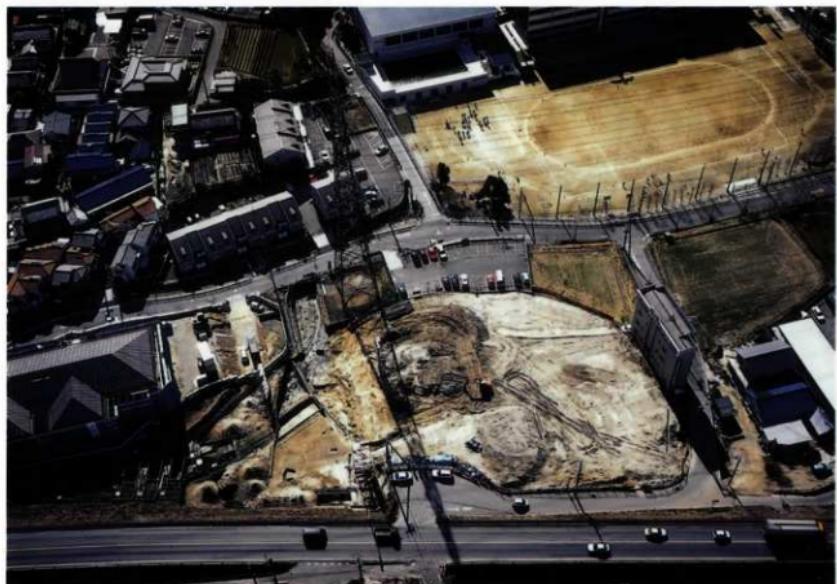
木間池北方遺跡発掘調査概要

——四條畷市中野所在——



1997年3月

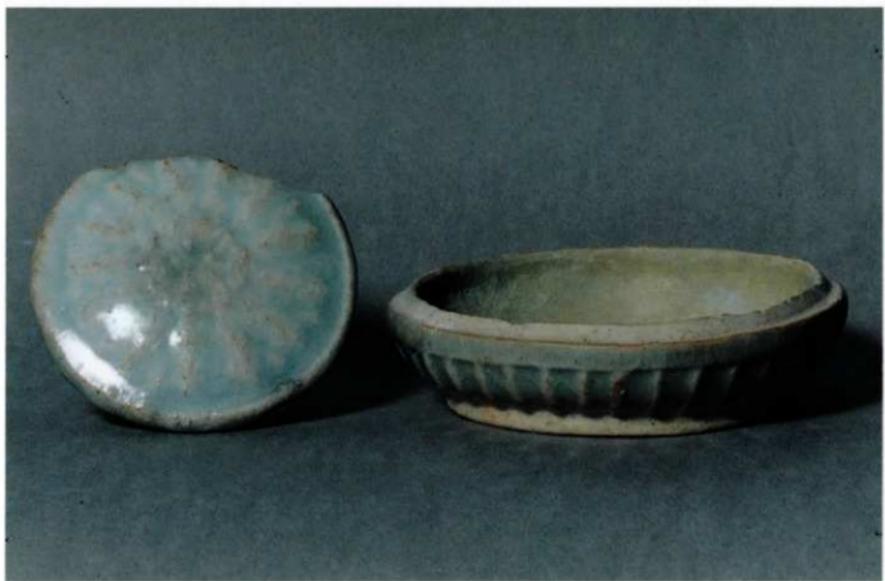
四條畷市教育委員会



木間池北方遺跡遠景（北から）



溝全景（北から）



青白磁印花蓮弁文小壺蓋

青磁合子身



白磁・青磁

はしがき

国道163号線と通称打上バイパス道の接合地域の文化財調査が一応の終結をむかえた。しかしこの地域は国道と府道の交点だけに調査面積も広く、長期に亘る調査であったので整理作業については未だに続行中である。その中で本調査区分について今回報告書の発行にこぎつけることができた。

この木間池北方遺跡は、東側・北側・北西側・西側とそれぞれ周知遺跡に囲まれたところであるだけに、当初から何らかの遺跡の存在や出土が予想された地域であった。また地形的にも南面した傾斜地であり、近辺に川が流れていることからでも人間の生活には最適の土地であることは他の事例からでも十分に考えられたところでもあった。予想通り盛り土や耕土の下には各時代にまたがる遺物、特に土器類や陶磁器類の出土が多く、この地も周辺の遺跡と同様に先人たちの「くらし」の場であったことに間違はないだろう。特に中世には、近隣の寺院や街道とも関連した人々の営みが感じられるのである。

私達は発掘の現場に立ったとき、現在の周辺状況からは想像できないような過去のその地の地形がありありと現出しているのに直面することがある。そのような時、土地に従い土地と共に暮らした先人たちと、土地を意のままに変容しようとする現代人の生活の基本型の変化に何か感じずにはいられない。

この遺跡もすぐに近代的な道路になり、洪水のように自動車に覆い尽くされることは明白である。しかしこれも現代社会の当然の帰着であり、その上に私達の生活が成り立つ構造が固定化してきて以上止むを得ないことなのかも知れない。けれどもそれだけに、今回もこの調査により古い時代の姿が正確に記録され判断できる事に大きな意義を見い出したいものである。

なお本調査に当たり、大阪府枚方土木事務所からいただいた大いなるご協力に厚く感謝の意を表してはしがきのことばをまとめたい。

平成9年3月

四條畷市教育委員会
教育長 木田 喜重

例　言

- 1　本書は、平成7年度の主要地方道枚方富田林泉佐野線（通称打上バイパス）新設工事に伴う発掘調査概要報告書である。
- 2　発掘調査は、大阪府枚方土木事務所の委託を受け、四條畷市教育委員会が実施した。調査期間等は本文中に記載している。
- 3　発掘調査は、四條畷市教育委員会歴史民俗資料館技師　村上始を担当者とし、調査補助員として岡田恵子があたった。調査に関する事務等については歴史民俗資料館職員の協力を得た。
- 4　発掘調査の実施にあたっては、大阪府枚方土木事務所・地元自治会・船場建設株式会社・東海アーナス株式会社・朝日航洋株式会社の御協力を得た。厚く感謝の意を表したい。
- 5　本書の作成にあたっては、大阪府教育委員会　佐久間貴士氏より御教示を賜った。記して感謝の意を表する。
- 6　出土遺物の整理・実測などについては、村上始・佐野喜美・萬谷満子・田中美鈴・佐野美佐子・橋本真紀・駒田佳子・正木由美が行なった。
- 7　本書の執筆は村上始が行なった。
- 8　調査において出土した遺物および写真・実測図面は、四條畷市立歴史民俗資料館に保管している。

凡　例

- 1　本書中のレベルは、T. P.（東京湾平均海面）を用いている。
- 2　本書中の座標の記録は、kmを単位とする。
- 3　方位は国土平面直角座標第VI系の座標北を示す。
- 4　土色および遺物の色調は、1994年度版『新版　標準土色帖』農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修に準拠した。

本文目次

はしがき

例 言

凡 例

第1章 遺跡の位置と歴史的環境 ······ 1

第2章 調査に至る経過 ······ 5

第3章 調査の成果

第1節 基本層序 ······ 7

第2節 遺構 ······ 10

 第1遺構面 ······ 10

 第2遺構面 ······ 10

第3節 出土遺物 ······ 15

 旧河川 ······ 15

 溝 ······ 29

 土坑 ······ 31

 包含層 ······ 31

第4章 ま と め ······ 33

遺物観察表 ······ 34

挿図目次

第1図 木間池北方遺跡周辺の遺跡	2
第2図 調査区位置図	6
第3図 土層断面図1	8
第4図 土層断面図2	8
第5図 第1遺構平面図	12
第6図 第2遺構平面図	12
第7図 遺物出土状況図	14
第8図 旧河川出土遺物1	16
第9図 旧河川出土遺物2	18
第10図 旧河川出土遺物3	20
第11図 旧河川出土遺物4	22
第12図 旧河川出土遺物5	24
第13図 旧河川出土遺物6	25
第14図 旧河川出土遺物7	26
第15図 旧河川出土遺物8	27
第16図 旧河川出土遺物9	28
第17図 溝出土遺物	30
第18図 溝・土坑・包含層出土遺物	32

図版目次

- 卷頭図版 1 木間池北方遺跡遠景（北から）
卷頭図版 2 溝全景（北から）
卷頭図版 3 青白磁印花蓮弁文小壺蓋・青磁合子身
卷頭図版 4 白磁・青磁
- 図版 1 遺跡周辺空中写真 1 北から 2 東から
図版 2 調査前全景 1 南から 2 北から
図版 3 1 第1遺構面検出全景（北から） 2 第1遺構面全景（北西から）
図版 4 1 第2遺構面検出全景（南東から） 2 遺構検出（南東から）
図版 5 1 調査スナップ 2 遺跡全景空中写真（東から）
図版 6 遺跡全景空中写真（真上から）
図版 7 1 遺構全景（北から） 2 遺構全景（南西から）
図版 8 溝全景（北から）
図版 9 1 溝全景（南から） 2 土坑全景
図版10 1 旧河川全景（北東から） 2 旧河川全景（南西から）
図版11 1 旧河川全景（北西から） 2 旧河川全景（北から）
図版12 旧河川遺物出土状況 1
図版13 旧河川・溝遺物出土状況 2
図版14 旧河川出土遺物 1
図版15 旧河川出土遺物 2
図版16 旧河川出土遺物 3
図版17 旧河川出土遺物 4
図版18 旧河川出土遺物 5
図版19 旧河川出土遺物 6
図版20 旧河川出土遺物 7
図版21 旧河川出土遺物 8
図版22 旧河川出土遺物 9
図版23 旧河川出土遺物 10
図版24 溝出土遺物 1
図版25 溝出土遺物 2
図版26 溝・土坑・包含層出土遺物

木間池北方遺跡調査概要

第1章 遺跡の位置と歴史的環境

木間池北方遺跡は、四條畷市中野2丁目・南野5丁目・南野6丁目地内に所在し、現在のところ東西約200m・南北約200mの範囲が古墳時代から中世にいたる集落跡の複合遺跡として周知されている。

四條畷市は大阪府の北東部に位置し、東は奈良県生駒市に、西は大阪府寝屋川市、南は大阪府大東市、北は大阪府寝屋川市・交野市に隣接している。

地勢の東半分は花崗岩質よりなる生駒山脈の一部で、その西側に大阪層群からなる丘陵と扇状地性の段丘および扇状地が南北に細長く広がっており、さらに西側は山地から西流する中小の河川によって形成された沖積平野が広がっている。

このうち当遺跡は、生駒山地から西流する清瀧川と権現川に挟まれた扇状地性の段丘の西端部分に立地している。付近の標高は、高いところでT. P. +28.900m、低いところでT. P. +23.800mを測り、北東から南西に向かって低くなっている。

以下四條畷市内および市周辺の遺跡について時代をおって概要を述べる。

旧石器時代の遺跡としては、削器・彫器・ナイフ形石器・細石器・礫器などが出土した四條畷市讀良川川床遺跡・木葉状尖頭器が出土した岡山南遺跡があり、周辺においてはナイフ形石器・チャート製有舌尖頭器が出土した枚方市の楠葉東遺跡・ナイフ形石器や搔器などが出士した藤阪宮山遺跡・船橋遺跡・交北城ノ山遺跡・田口山遺跡・津田トッパナ遺跡・津出三ツ池遺跡、旧石器時代の遺跡として近畿地方で初めて発見された交野市の神宮寺遺跡・ナイフ形石器や石核・剥片が出土した布懸遺跡、寝屋川市淀川河床遺跡・高宮遺跡、後期の有舌尖頭器が出土した大東市の宮谷古墳群と北条遺跡などが知られている。

縄文時代の遺跡としては、草創期の有舌尖頭器が出土した四條畷市の南山下遺跡と四條畷小学校内遺跡、早期の米粒文・山形文を施した押型文土器が出土した四條畷市の田原遺跡、枚方市の穂谷遺跡・磯島先遺跡、神宮寺式土器の標式遺跡である交野市の神宮寺遺跡などがある。中期には船元式土器が出土した四條畷市の南山下遺跡・砂遺跡、交野市の東倉治遺跡・星田旭遺跡、大東市の中垣内遺跡・鍋田川遺跡、寝屋川市の讀良川遺跡などがある。特に讀良川遺跡では、大量の船元式土器や関東系・東海系や中部系の土器のほか貯蔵穴が検出された。この遺跡の下層からはクリ・ドングリが、上層からはセタシジミ・マガキなどの貝殻やイノシシ・シカなどの骨が出土し、貯蔵穴として利用されたのちにゴミ穴となっていたことがわかった。後期・晩期には高杯形土器・深鉢形土



- | | | | |
|--------------|--------------|------------|-----------|
| 1 讀良郡条里遺構 | 11 南山下遺跡 | 21 国中神社遺跡 | 31 墓谷古墳群 |
| 2 砂遺跡 | 12 石宝殿古墳 | 22 大上遺跡 | 32 飯盛山城跡 |
| 3 小路遺跡 | 13 錄田遺跡 | 23 木間池北方遺跡 | 33 城ヶ谷遺跡 |
| 4 三味頭遺跡 | 14 中野遺跡 | 24 城遺跡 | 34 宮谷古墳群 |
| 5 讀良川・更良岡山遺跡 | 15 墓の堂古墳 | 25 南野米崎遺跡 | 35 北条東古墳群 |
| 6 北口遺跡 | 16 奈良井遺跡 | 26 雁屋遺跡 | 36 北条西古墳群 |
| 7 奈良田遺跡 | 17 四條畷小学校内遺跡 | 27 伝椿木正行墓 | 37 大將軍古墳 |
| 8 忍岡古墳 | 18 正法寺跡 | 28 北新町遺跡 | 38 野崎城跡 |
| 9 坪井遺跡 | 19 清滄古墳群 | 29 南野遺跡 | |
| 10 忍ヶ丘駅前遺跡 | 20 岡山南遺跡 | 30 近世墓地 | |

第1図 木間池北方遺跡周辺の遺跡

器・注口土器・土製勾玉・土偶・石器など多量の遺物が出土した四條畷市の更良岡山遺跡があげられる。この遺跡は、前述の讚良川遺跡の東隣に位置し同一の遺跡と考えられる。また岡山南遺跡・清瀧古墳群・四條畷小学校内遺跡においても石鎚や深鉢形土器が出土している。周辺地域では、土器・石劍・石棒や埋葬遺構を検出した枚方市の交北城ノ山遺跡・岡東遺跡・大東市の城ヶ谷遺跡などが知られている。

弥生時代の遺跡としては、前期初頭の高さ約70cmの大壺が出土した四條畷市の雁屋遺跡・前期中段階の甕や煮が出土した四條畷小学校内遺跡・前期末の壺が出土した田原遺跡・枚方市の磯島先遺跡・寝屋川市の高宮八丁遺跡・大東市の北新町遺跡・中垣内遺跡・北条西遺跡がある。中期では四條畷市の雁屋遺跡において多くの方形周溝墓や堅穴住居跡を検出し、大量の土器や石器と共に木製四脚容器・鳥形木製品・分銅形土製品・舌状石製品などが出土している。特に堅穴住居跡の一軒は火灾を受けたもので、炭化した建築部材も出土している。出土状況から当時の住居の規模を知る上で注目されるものである。周辺地域では、枚方市の田口山遺跡・星丘西遺跡・交北城ノ山遺跡・高地性集落である寝屋川市の太秦遺跡・大東市の国見高地性遺跡・中垣内遺跡・西諸福遺跡がある。後期では四條畷市の雁屋遺跡・大東市の北新町遺跡などのほか周辺地域において多くの遺跡が知られている。それらのうち高地性集落としては枚方台地上立地する田口山遺跡・長尾西遺跡・長尾東遺跡・出屋敷遺跡や香里丘陵上に立地する鷹塚山遺跡があり、鷹塚山遺跡からは小型彷彿鏡や分銅形土製品・球状土製品・皮袋状土器など祭祀的な遺物が出土している。

古墳時代前期の古墳としては、全長約90mの前方後円墳で長さ約6.3m・幅約1mの堅穴式石室から石劍・紡錘車・鐵形石・鉄劍・鉄鋒・鉄製斧・鉄製鎌・刀子・鐵鎌などが出土した四條畷市の忍岡古墳・粘土櫛内から三角縁神獸鏡6面・三角縁竜虎鏡1面・平縁獸帶鏡1面が出土した枚方市の万年寺山古墳・粘土櫛内から画文帶現状乳神獸鏡1面・銅鏡6本・雞形石製品2点などが出土した藤田山古墳・粘土櫛内から硬玉製勾玉・ガラス製小玉・碧玉製管玉・鉄劍・刀子などが出土した交野市の妙見山古墳・前方後円墳と円墳で構成されている森古墳群がある。中期の古墳としては、前方後円墳である枚方市の禁野車塚古墳・牧野車塚古墳・円墳4基・前方後方墳1基・方墳1基で構成され、前方後方墳（東車塚古墳）から甲冑・巴形銅器・筒形銅器・鏡・刀劍類・石劍・玉類などが出土した交野市の車塚古墳群・甲冑・刀劍類・鐵製農工具類などを納めた副棺をもつ大東市の堂山古墳群1号墳などがある。後期になると生駒西山麓に数多くの古墳群が造営される。代表的なものとしては、四條畷市の清瀧古墳群・更良岡山古墳群・大上遺跡・横穴式木室をもつ枚方市の宇山1号墳・中宮古墳群・白雉塚・比丘尼塚・交野市の寺古墳群・倉治古墳群・北河内最大の横穴式石室をもつ寝屋川市の寝屋古墳・大東市の北条古墳群・宮谷古墳群・墓谷古墳群・堂山古墳群などがある。終末期では寝屋川市の国指定史跡石宝殿古墳がある。

またこの時代は、市内をはじめ当時の河内湖縁辺部にあたるところに多くの集落が営まれるようになる。市内の遺跡としては、5本の堅魚木を持つ切妻造りの家形埴輪・動物埴輪とともに木製下駄が出土した岡山南遺跡、5世紀後半の須恵器とともに馬形・犬形・水鳥形・鶴形などの動物形埴

輪や人物形埴輪・衣蓋形埴輪など大量の埴輪や土器類が集落内の遺構から出土した忍ヶ丘駅前遺跡・南山下遺跡、初期の須恵器や勾玉、白玉など大量の玉類・紡錘車・製塩土器が出土した中野遺跡、手づくね土器・人形土製品・動物形土製品・滑石製品が出土した周溝内に小型馬が埋葬されていた方形周溝状の祭祀遺構や石敷製塩炉を検出した奈良井遺跡、水田跡や水口祭祀跡を検出した鎌田遺跡、木間池北方遺跡、四條畷小学校内遺跡などがある。

飛鳥・奈良時代の遺跡としては、7世紀後半の土器が一括で出土した土坑や多くの土器と共に7体分の土製馬形が出土した河川を検出した四條畷市の木間池北方遺跡・「大」と墨書された土師器壊が河川から出土した南野遺跡・素弁蓮華文軒丸瓦や土器類が出土した四條畷小学校内遺跡、5棟の掘立柱建物跡群や大溝を検出した枚方市の船橋遺跡、寝屋川市の打上遺跡・長保寺遺跡、人面墨書き土器や「美濃」刻印の須恵器などが出土した大東市の北新町遺跡などがある。

寺院跡としては四條畷市の正法寺跡・讚良寺跡、枚方市の九頭神廃寺・中山觀音寺跡、寝屋川市の高宮廃寺・太秦廃寺がある。特に正法寺跡は薬師寺式の伽藍配置であると推定されており、平成5年の大阪府教育委員会による調査で、奈良時代の掘立柱建物と平安時代の基壇建物などを検出し、創建時の素弁蓮華文軒丸瓦や重弧文軒平瓦、複弁蓮華文軒丸瓦や均整唐草文軒平瓦などが出土している。また基壇の北東角で検出した土坑内からは10世紀前半の土師器・黒色土器が多く出土し、そのうち底部外面に「正方寺」と墨書された土師器壊が1点が含まれていた。

平安時代の遺跡としては、井戸内から底部外面に「高田宅」・「福万宅」と墨書きされている黒色土器壺や土師質皿・綠釉陶器皿などが出土した四條畷市の岡山南遺跡、黒色土器と甕を藏骨器に転用し納めていた土壙を検出した上清滝遺跡、「富寿神宝」を入れた藏骨器が出土した交野市の私市滝ケ広遺跡、綠釉陶器や灰釉陶器・大量の黒色土器が出土した寝屋川市の神田東後遺跡・高柳遺跡などがある。

寺院跡としては、枚方市の特別史跡百濟寺跡が知られている。この寺は8世紀末に百濟王氏が一族の氏寺として建立したものである。

鎌倉時代から室町時代の遺跡は市内をはじめ周辺の各市において数多く存在している。四條畷市の清滝街道沿いに所在する上清滝遺跡では「塔の坊」という小字名が残っているところにおいて方形基壇を検出し、その近くの斜面の溝からは壽永3年(1184年)銘の題義輪とともに金箔塗り光背・木製聖觀音立像・漆器・箸・下駄・将棋の駒・瓦器壺・土師器・白磁・天目茶碗・茶臼・茶釜・砥石・硯などが出土した。また近くからは瓦器壺を焼成した窯跡を検出している。坪井遺跡では、鎌倉時代の鍛冶工房跡を検出している。

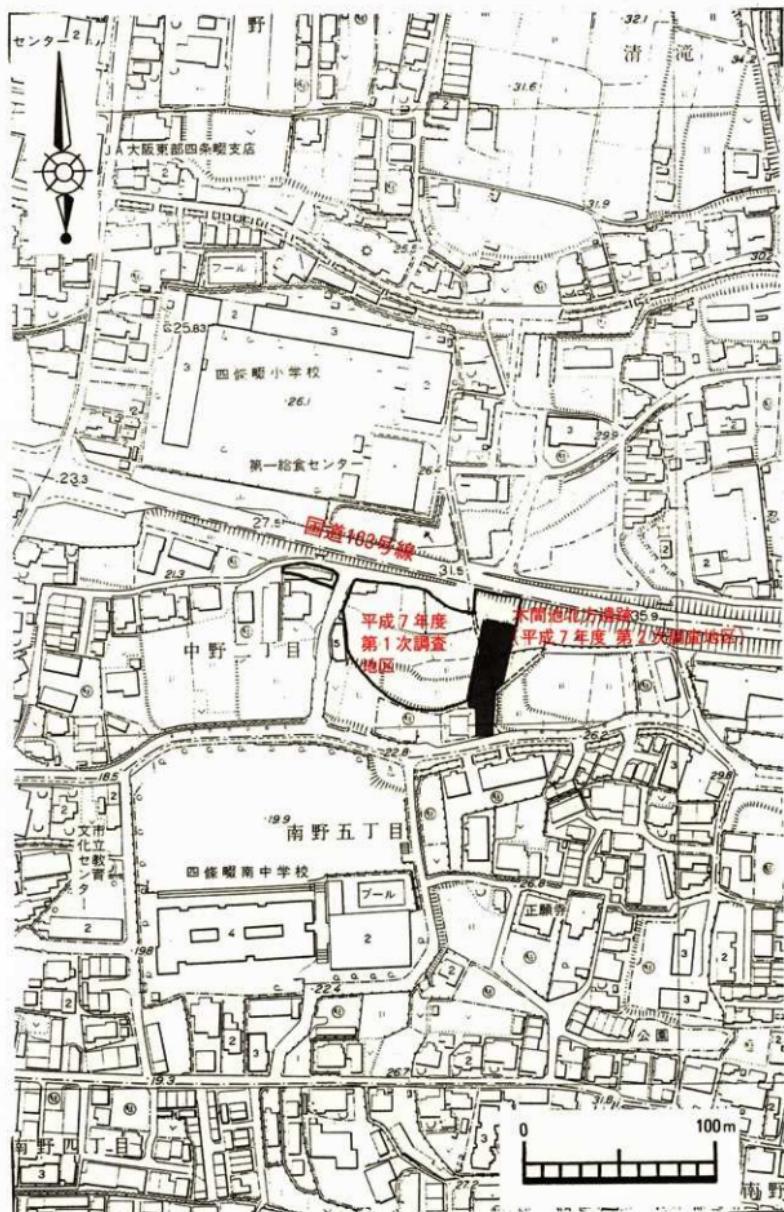
戦国時代では三好長慶の居城であった飯盛山城跡があり、田原地区にはその支城であった田原城跡がある。近年、寺口遺跡の調査において田原城主田原対馬守一族の墓地および寺跡を確認した。墓地では常滑の大甕を集團の納骨施設としていた遺構や古瀬戸の水注を藏骨器に転用した墓などを検出し、副葬品として青磁袴腰香炉や青白磁小壺が出土した。寺跡では土壙跡などを検出し、多くの土器類や瓦類が出土した。また平瓦には「千光寺」と刻印されているものも出土している。

第2章 調査に至る経過

木間池北方遺跡は、四條畷市中野2丁目・南野5丁目・南野6丁目地内に所在する遺跡である。この遺跡は、清滝川と江瀬美川に挟まれた生駒山系から西へ延びる段丘上とその南側に存在し、現在のところ東西約200m・南北約200mの範囲が古墳時代から中世にいたる集落跡の遺跡として周知されている。

この遺跡の北西側には四條畷小学校内遺跡が隣接しており、過去の数次にわたる調査の結果、縄文時代・弥生時代・古墳時代・奈良時代・平安時代・中世・近世の各時代の遺構・遺物を発見し、複合遺跡として周知されている。西側には市内で最大の古墳時代の集落跡である中野遺跡、東側には古墳群である大上遺跡、清滝川を挟んで北側の台地上には白鳳時代創建の正法寺跡がある。また清滝川沿いには、市内の中心を東西方向に走り大阪と奈良を結ぶ古くからの清滝街道が存在している。これら周辺の遺跡の状況と立地条件から、当遺跡に関しても上記の時代の遺構の存在が十分に考えられた。また、1995年6月末から今回の調査予定地の西隣で建設省浪速国道工事事務所の依頼による発掘調査（木間池北方遺跡平成7年度第1次発掘調査）を行なった結果、奈良時代から中世にかけての集落跡と古墳の周溝を検出し、その一部の遺構は今回の発掘調査予定地内に向かって拡がっていることがわかった。

以上、当遺跡内で主要地方道枚方・富田林・泉佐野線（打上バイパス）新設工事を行なうにあたって大阪府枚方土木事務所と協議を行なった結果、工事によって埋蔵文化財が破壊されることから、その記録保存のために事前に発掘調査を行なうこととなった。調査面積は1072m²で、調査期間は平成7年（1995年）10月12日から平成8年（1996年）2月15日までであった。遺物の整理作業は、平成8年（1996年）4月30日に大阪府枚方土木事務所長と四條畷市長が埋蔵文化財発掘調査出土品の整理業務実施計画にもとづき、発掘調査出土品整理委託契約書を締結し実施することとなり、平成9年（1997年）3月31日までに終了した。



第2回 調査区位置図

第3章 調査の成果

今回の発掘調査は、工事によって遺構の破壊が予測される部分の全面発掘調査であり、面積は約1072m²である。なお調査地区内は、国土平面直角座標値（第VI系）を用いて10m四方の区画設定を行ない、それぞれの区画は、その南西にあたる杭のX・Y値をもってその名称とした。

発掘調査は、重機により盛り土・耕土・床土を機械掘削したのち人力により堆積土（遺物包含層）を層位ごとに掘り下げ、各面で遺構の有無の確認を行いながら進めていった。

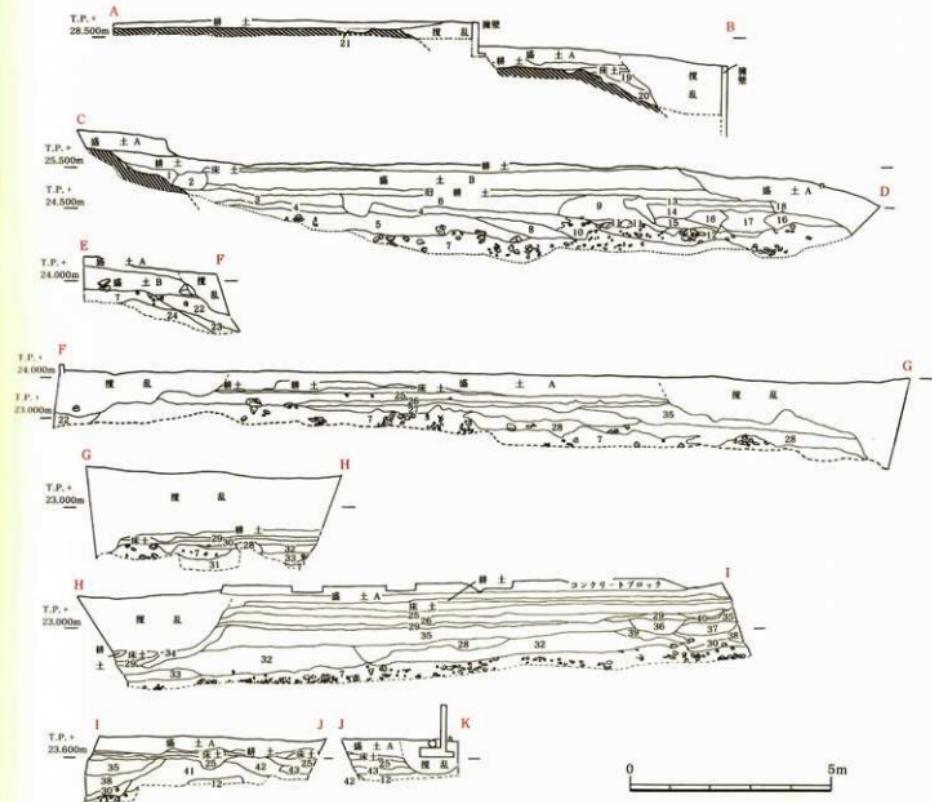
第1節 基本層序（第4図）

今回の調査地区的地表面の標高は、北端でT. P. +28.900m、南端でT. P. +23.800mであり、調査前は北から南へ向かって約5mの高低差をもつ4面の棚田状の耕作地であった。

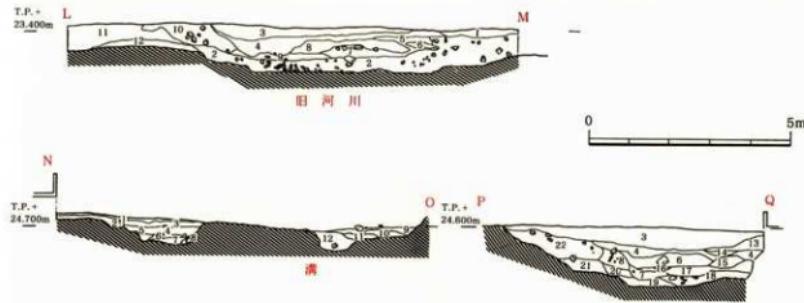
以下、確認した基本層序を上層から記載する。

- 第I層 盛り土A、上面はT. P. +28.300～23.900mで、厚さは40cm前後である。現代の盛り土。
- 第II層 耕土、上面はT. P. +28.900～23.800mで、厚さは10～20cmである。現代の耕土。
- 第III層 床土、厚さ10～20cm。現代の床土。
- 第IV層 盛り土B、上面はT. P. +25.500～24.400mで、厚さは50～60cmである。この盛土は、
 $X = -140.290 \cdot Y = -32.095$ 地区でのみ確認した。近代以降の盛り土。
- 第V層 旧耕土、上面はT. P. +25.000mで、厚さは10～30cmである。この耕土も $X = -140.290 \cdot Y = -32.095$ 地区でのみ確認した。近代以降の耕土。
- 第VI層 灰色系の砂質土、厚さ50～80cm。中世～近世の包含層。
- 第VII層 灰色系の粗砂層で礫を含んでいる土層もある。厚さは1m～1.5m前後である。これは旧河川内の堆積土である。
- 第VIII層 花崗岩や礫が混ざった土層で堅くしまっている。溝・旧河川及び土坑の検出面で、南西へ向かうほど低くなっている。地山面である。

以上のことからこの地は、中世には存在していた旧河川と中世に掘られた溝が近世にかけて埋まつたあと（基本層序第VI層）耕作地として利用されている。次に近代以降に部分的に盛り土（基本層序第IV層）を行ない耕作地を整理し、現代になって一部の耕作地に盛り土（基本層序第I層）を行ない宅地として利用していたと考えられる。



第3図 土層断面図 1



第4図 土層断面図 2

調査地区壁断面 (A~K)

第1層	明緑灰色砂質土 (7.5GY 7/1)	第22層	灰白色細砂 (2.5Y 8/2)
第2層	明緑灰色砂質土 (5G 7/1)	第23層	灰色細砂 (N 5/)
第3層	灰色砂質土 (N 6/)-粗砂混入	第24層	灰白色粗砂 (5Y 8/1)-礫混入
第4層	灰色砂質土 (N 4/)-粗砂混入	第25層	灰オリーブ色砂質土 (5Y 6/2)
第5層	灰色粘質土 (N 5/)-粗砂混入	第26層	灰色砂質土 (N 6/)
第6層	明緑灰色砂質土 (7.5GY 7/1)-粗砂混入	第27層	明オリーブ灰色砂質土 (5GY 7/1)
第7層	灰白色砂礫 (2.5Y 8/2)	第28層	灰色砂質土 (7.5Y 5/1)
第8層	灰色砂質土 (7.5Y 4/1)	第29層	にぶい橙色砂質土 (7.5YR 7/4)
第9層	明オリーブ灰色砂質土 (2.5GY 7/1)	第30層	赤灰色腐植土 (2.5YR 4/1)
第10層	灰色細砂 (N 6/) に灰白色粗砂 (7.5Y 8/1) 混入	第31層	暗青灰色粘質土 (10BG 3/1)
第11層	褐灰色腐植土 (7.5YR 4/1)	第32層	灰白色粗砂 (7.5Y 8/1) と 灰白色シルト (5Y 7/1) の混合層
第12層	橙色砂礫 (7.5YR 6/8)-7層に鉄分混入	第33層	暗青灰色砂質土 (10BG 4/1)
第13層	黄橙色砂質土 (10YR 8/8)	第34層	灰黃褐色砂質土 (10YR 6/2)
第14層	にぶい黄橙色砂質土 (10YR 7/2)	第35層	灰黃褐色砂質土 (10YR 4/2)
第15層	灰白色砂質土 (10YR 7/1)	第36層	黄灰色砂質土 (2.5Y 5/1)
第16層	灰黄色砂質土 (2.5Y 7/2)	第37層	灰白色粗砂 (2.5Y 8/1)
第17層	灰白色砂質土 (2.5Y 8/1)-粗砂混入	第38層	灰色粘質土 (7.5Y 5/1)
第18層	灰白色砂質土 (10YR 7/1)	第39層	灰色砂質土 (5Y 5/1)
第19層	灰黄色砂質土 (2.5Y 6/1)	第40層	黄灰色砂質土 (2.5Y 6/1)
第20層	灰黃褐色砂質土 (10YR 5/2)	第41層	灰白色砂礫 (10YR 8/1)
第21層	にぶい黄褐色砂質土 (10YR 5/3)	第42層	灰白色シルト (2.5Y 8/2)
		第43層	浅黄橙色粗砂 (7.5YR 8/6)

旧河川東西断面 (L~M)

第1層	灰色砂質土 (10Y 5/1)
第2層	灰白色砂礫 (2.5Y 8/2)
	腐植土及び鉄分混入
第3層	灰褐色砂質土 (7.5YR 5/2)
第4層	黄灰色砂質土 (2.5Y 5/1)
第5層	灰色砂質土 (7.5Y 5/1)
第6層	黒褐色腐植土 (5YR 3/1)

第7層	青灰色粗砂 (10BG 6/1)
第8層	淡黃色砂質土 (5Y 8/4)
	粗砂混入
第9層	褐灰色砂質土 (10YR 5/1)
第10層	灰褐色砂礫 (5YR 4/2)
第11層	灰白色粗砂 (2.5Y 8/2)
第12層	明褐色粗砂 (7.5YR 5/8)
	11層が鉄分により変色

溝東西断面 (N~O)・旧河川南北断面 (P~Q)

第1層	灰色砂質土 (N 4/)
第2層	暗青灰色砂質土 (5B 4/1)
第3層	灰黄色砂質土 (2.5Y 6/2)-鉄分混入
第4層	黄灰色砂質土 (2.5Y 5/1)-礫混入
第5層	灰白色シルト (10Y 8/1)
第6層	青灰色粘質土 (10B 5/1)
第7層	灰白色砂礫 (7.5Y 8/2)
第8層	赤灰色腐植土 (5R 5/1)
第9層	明褐色砂質土 (7.5YR 7/1)
第10層	灰白色砂質土 (10YR 7/1)
第11層	にぶい黄橙色砂質土 (10YR 7/1)

第12層	灰黄色砂質土 (2.5Y 7/2)
第13層	明黃褐色砂質土 (10YR 6/6)
第14層	淡黄色細砂 (2.5Y 8/4)
第15層	灰白色粗砂 (7.5Y 8/2)
第16層	灰白色粗砂 (N 7/)
第17層	灰色砂質土 (7.5Y 4/1)
第18層	灰白色砂礫 (N 7/)
第19層	褐灰色粘質土 (10YR 5/1)
第20層	8層に灰白色粗砂 (N 8/) 混入
第21層	明青灰色粗砂 (10BG 7/1)
第22層	花崗岩崩落土

第2節 遺構

第1遺構面（第5図・図版3）

●耕作溝

この遺構面は、 $X = -140.310 \cdot Y = -32.100$ 地区、 $X = -140.310 \cdot Y = -32.110$ 地区、 $X = -140.320 \cdot Y = -32.100$ 地区、 $X = -140.320 \cdot Y = -32.110$ 地区、すなわち調査地区的南端部で検出した。遺構の検出面は灰色砂質土層（第3図-第26層）の上面で、その標高は、T. P. +23.260~23.400m前後である。遺構としては、耕作に伴う溝を14本確認した。溝の大半は東西方向に主軸をおき直線的に掘られている。長さは最長のもので約5.5m、最短のもので約1.5mを測り、幅は約20~50cm、深さは約2~5cmを測った。遺物は、近世の陶磁器片が出土している。

これらの遺構の北側が一段高くなっていることから、本来は北東方向から南西方向へ向かって低くなっていく棚田状の耕作地であったと思われる。しかし $X = -140.300 \cdot Y = -32.100$ 地区、 $X = -140.300 \cdot Y = -32.110$ 地区より北側は、現代の耕作や宅地の建築によって大半が攪乱されておりその保存状態は良好ではなかった。

第2遺構面（第4・6~7図、図版4~13）

この遺構面は、調査地区の全域で検出した。以下この遺構面で検出した遺構について述べる。

●旧河川（第4図・第6図・第7図、図版4-1・5・6・7・10・11・12・13）

この遺構は、 $X = -140.290 \cdot Y = -32.090$ 、 $X = -140.290 \cdot Y = -32.100$ 、 $X = -140.290 \cdot Y = -32.110$ 、 $X = -140.300 \cdot Y = -32.100$ 、 $X = -140.300 \cdot Y = -32.110$ 、 $X = -140.310 \cdot Y = -32.100$ 、 $X = -140.310 \cdot Y = -32.110$ 、 $X = -140.320 \cdot Y = -32.100$ 地区、すなわち調査地区的ほぼ中央から南側において検出した。平面形態は北東-南西方向に主軸をおく直線的なもので、北東端から約17mの地点で北側からの溝と合流する。周囲の地形や後述する規模から考えて今回検出したものは旧河川の右岸であることが判明した。この旧河川についてはその岸にあたる部分の検出は今回の調査が初めてであり、その規模等についても現在までの所不明な点が多かったが、今回の調査でその一部が明らかになった。今回の調査地区内の規模は、全長約25m・北東端の深さ約1.5~1.8m前後、南西端の深さ約1.6m前後であった。右岸の標高は、北東端でT. P. +24.820m・溝との合流地点付近でT. P. +24.680~24.700m・南西端でT. P. +24.530mを測り、約30cmの高低差をもって北東方向から南西方向に向かって低くなっている。底部の標高は、北東端の右岸下でT. P. +23.000~23.320m・溝との合流地点付近の右岸下でT. P. +22.680m・南西端の右岸下でT. P. +22.900mであり、調査地区的南端が最も低くT. P. +21.600m前後を測った。これらのことから前述したとおり、今回検出したものは周囲の地形に沿って、北東方向から南西方向に向かって流れる旧河川の右岸の一部であると考えられる。また堆積土は、下層付近では灰色系の粗砂層が

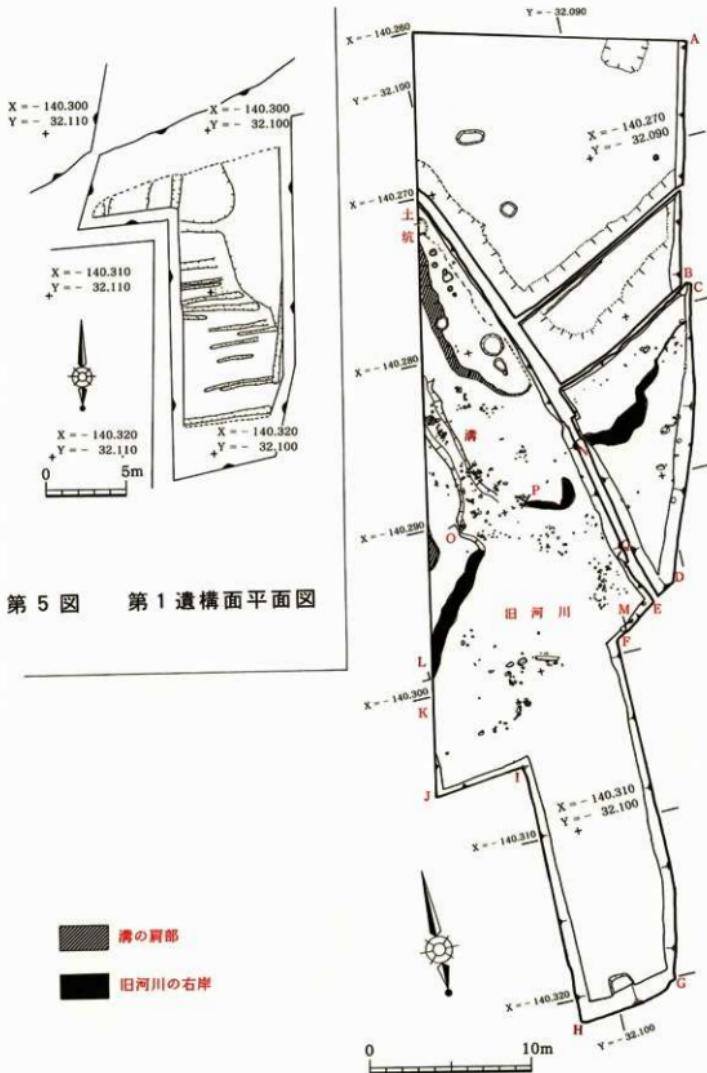
基本で小礫から50cm大の花崗岩が多く含まれていたが、中層から上層付近では灰色系の砂質土が基本で、腐食土層や粘質土層も観られることから徐々に流れが緩やかになりながら埋まっていった様子が確認できた。旧河川の全体像については、今回の調査地区内で検出した部分だけでは明確にすることはできなかったが、調査地区的南側を東西に通じている市道において下水管の埋設工事に際して立会調査を行なった結果、道路面下約30cmから下層はすべて河川の堆積土と思われる砂層であったことや調査地区的南西約50mのところに所在する四條畷市立南中学校を建設する以前は、現在のグランドの中央付近に川が存在していたという状況から考えると、旧河川の左岸はこの辺りに存在し、長い年月の間にその流路に変化があったとしてもその規模は大きなものであったと推測できる。

遺物は、土師器皿（第7図-1・2・第8図-1~19、図版12-1・図版14-1~19）・瓦器皿（第8図-20~21、図版15-20~21）・瓦器椀（第8図-22~32、図版15-22~32）・須恵器甕（第9図-33、図版16-33）・瓦質風炉（第9図-34、図版16-34）・瓦質三足釜（第9図-35~40、図版16-35~40）・土師質羽釜（第9図-41、図版16-41）・須恵器壺蓋（第10図-42~46・47・図版17-42~46・47）・須恵器壺身（第10図-43~45・図版17-43~45）・須恵器甕（第10図-48~49・図版17-48~49）・須恵器罐（第10図-50・図版13-2・図版17-50）・須恵器練鉢（第10図-51~59・図版18-51~59）・土師器高杯（第11図-60・図版17-60）・土師器把手（第11図-61~67・図版19-61~67）・移動式甕（第11図-68~69・図版19-68~69）・青白磁印花蓮弁文小壺蓋（第12図-70・図版13-5・図版20-70）・青磁碗・皿（第12図-71~78・図版20-71~78）・白磁碗・皿（第12図-79~92・図版21-79~92）・綠釉陶器椀（第12図-93・図版20-93）・石器類（第7図-6・第12図-94~95・図版12-6・図版13-3・図版21-94~95、第7図-4・第13図-97~98・図版12-4・図版22-97~98）・滑石製石鍋（第12図-96・図版21-96）・銭貨（第7図-3・第13図-99・図版12-3・図版22-99）・土製仏像（第13図-100・図版13-4・図版22-100）・木製下駄（第7図-2・5・第14図-101~102・図版12-2・5・図版22-101~102）・瓦類（第15~16図-103~107・図版23-103~107）・馬齒（第7図-2）が中層および下層から出土している。

●溝（第4図・第6図・第7図、図版4-1・5・6・7・8・9）

この遺構は、X=-140.280・Y=-32.110、X=-140.290・Y=-32.100、X=-140.290・Y=-32.110、X=-140.300・Y=-32.110地区、すなわち調査地区的ほぼ中央において検出した。図版では溝の西側肩部も写っているが、大阪府枚方土木事務所から依頼があった平成7年度第2次発掘調査の範囲は第6図に示すとおりであり、溝の北西側約半分は今回の発掘調査の前に建設省浪速国道工事事務所からの依頼で行なった平成7年度第1次発掘調査で検出したものである。しかしこの概要報告書では溝の全容に近いものを報告する必要から規模などについては隣地で検出した溝を含めて示すこととする。

平面形態は直線的なもので、ほぼ北-南方向に主軸をおく。断面形態は北端でU字状、中央よりやや北側からは逆凸形を呈する。規模は、全長約30m・北端の幅約6m・南端の幅約8m・北端の深さ約1.7m・南端の深さ約1.7m、2段掘りの底部の幅約1~1.6m・深さ約0.4~0.8mを測る。



第5図 第1遺構面平面図

第6図 第2遺構面平面図

肩部の標高は、北西角でT. P. +28.480m、北東角でT. P. +28.500m、南西角でT. P. +25.760m、南東角でT. P. +25.850mを測り、肩部は約2.7mの高低差をもって南へ向かって低くなっている。底部の標高は、北端でT. P. +26.790m、南端でT. P. +24.140mを測り、約2.6mの高低差をもって南へ向かって低くなっている。この溝の下流は、前述した北東方向から南西方向に向かって流れる旧河川に合流している。この溝は北東方向から南西方向へ向かって低くなっている周囲の地形に沿ったものではなく、その主軸をほぼ南北方向においていることから人工的に掘られたものであると考える。

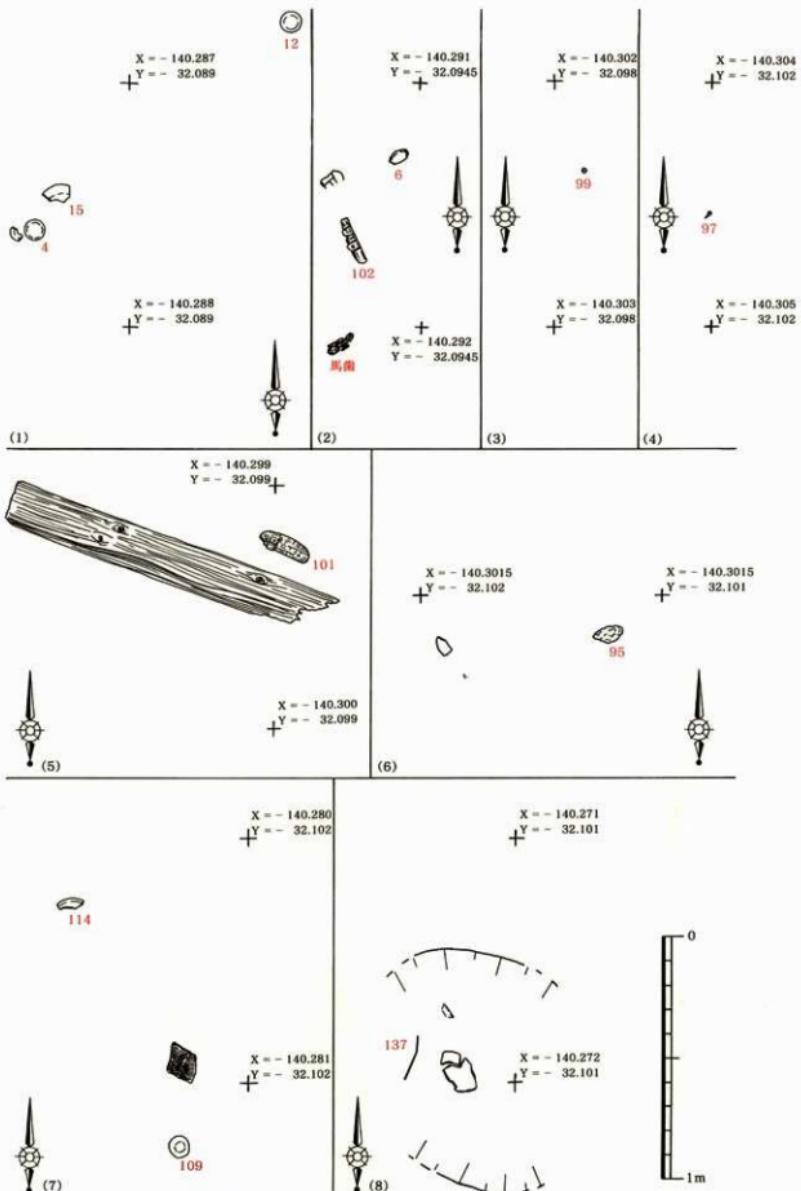
遺物は、土師器皿（第7図-7・第17図-108~114・図版13-1・図版24-108~114）・須恵器甌（第17図-115・図版13-6・図版24-115）・瓦器皿（第17図-116~118・図版24-116~118）・瓦器椀（第17図-119~124・図版25-119~124）・青磁合子身（第18図-125・図版25-125）・青磁碗（第18図-126・図版25-126）・白磁碗（第18図-127~130・図版25-127~130）・均整唐草文軒平瓦（第18図-131・図版26-131）・瓦質三足釜（第18図-132・133・図版24-132・133）・砥石（第18図-134・135・図版26-134・135）が中層および下層から出土している。

●土坑（第6図・第7図、図版4・5・6・7・8・9-2）

この遺構は、X=-140.280・Y=-32.110地区、すなわち調査地区的北側において検出した。東側の上端は後世の攪乱で破壊されており、西側の上端は溝によって切られているが、平面形態は円形であったと思われる。規模は、上端の直径約1m・下端の直径約0.7m・深さ約28cmを測った。上端の標高はT. P. +27.240mで、底部の中心はT. P. +26.960mを測った。

遺物は、瓦器椀（第18図-136）・須恵器練鉢（第7図-8・第18図-137・図版26-137）が上層から出土している。

以上、旧河川・溝・土坑について述べてきた。今回の調査ではこれらのほかにも14基の土坑と1本の溝を検出しているが、遺物が出土しなかったため時期などは明確ではない。ただし溝の東側の肩部付近で検出した10基の土坑は、前述した土坑と同じ面で検出したという状況や埋土の観察からそれとほぼ同じ時期のものであろうと考えている。調査区の北東側（X=-140.270・Y=-32.090、X=-140.270・Y=-32.100、X=-140.280・Y=-32.090・X=-140.280・Y=-32.100）地区に関しては、現代の耕土下がすぐに地山面であり3基の土坑もこの面で検出した。ただし面積から考えると遺構の存在密度は低いものであった。このことは、建設省浪速国道工事事務所の依頼で発掘調査を行なった北隣の地域においても同じ様な結果であった。以上のことからこの地区に関しては、元来遺構が少ない地域であるという考え方と後世に削平されたため遺構の一部だけが残ったという考え方ができる。



第7図 遺物出土状況図 (1~6:旧河川、7:溝、8:土坑)

第3節 出土遺物

今回の遺物の大半は旧河川から出土したものであり、ほとんどが食膳具・煮炊き具といった土器・陶磁器類であったが、瓦類・木製下駄・錢貨・土製仏像・石器類といったものも出土している。時期的には、鎌倉時代のものが中心で縄文時代や古墳時代・奈良時代のものも出土している。

以下、造構ごとに記述する。

●旧河川出土遺物

1~13は土師器の小皿である。(第7図-1・2・第8図・図版12-1・図版14)

平底の底部から体部が逆八の字形に大きく開き、口縁端部が丸く納まるもの(1)、若干丸味をもった平底の底部から体部が逆八の字形に大きく開き、口縁端部が丸く納まるもの(2)、丸底ぎみの底部から口縁部が外上方へ伸び、口縁端部が丸く納まるもの(3・5)、平底ぎみの底部から口縁部が外上方へ伸び、口縁端部が若干立ち上がるるもの(4・6・8)、丸底ぎみの底部から口縁部までゆるやかに内湾しながら続くもの(7)、平底ぎみの底部から口縁部が外上方へ伸び、口縁端部が厚いもの(9)、平底ぎみの底部から口縁部が外上方へ伸び、口縁端部が丸く納まるもの(10)、平底ぎみの底部から口縁部までゆるやかに内湾しながら続くもの(11)、若干上げ底ぎみの平底の底部から口縁部までゆるやかに内湾しながら続くもの(12)に分類できる。口径は10cm未満で、器高は2cm未満のものである。13は丸底の底部から体部が外上方へ伸び、体部と口縁部との境には強いヨコナデによる段がみられる。体部外面の一部と底部内面にはヘラミガキが施されている。この土器は小皿として分類しているが他のものとは明らかに成形技法が違うものである。

14~18は土師器の中皿である。(第7図-1・第8図・図版12-1・図版14)

丸底ぎみの底部から口縁部が外上方へ伸びるもの(14)、平底の底部から口縁部が外上方へ伸び、口縁端部が若干立ち上がるるもの(15)、若干上げ底ぎみの平底の底部からゆるやかに内湾しながら口縁部に至り、口縁端部を丸く納めるもの(16)、平底の底部からゆるやかに内湾しながら口縁部に至り、体部と口縁部の境に段をもち口縁端部を丸く納めるもの(17)、丸底ぎみの底部からゆるやかに内湾しながら口縁部に至り、体部と口縁部の境に段をもち口縁部が外反するもの(18)に分類できる。口径は15cm以下で、器高は3cm以下のものである。

19は土師器の大皿である。(第8図・図版14)

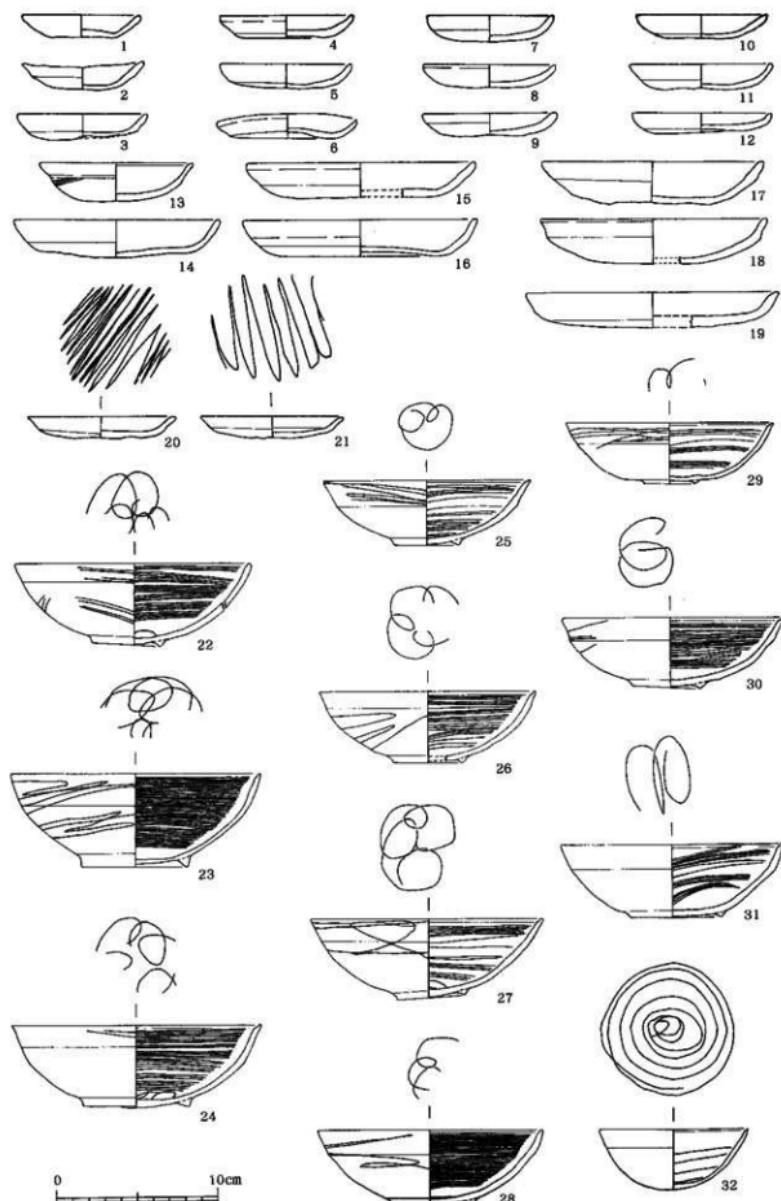
平底の底部から口縁部が外上方へ伸び、口縁端部が尖りぎみのもので、口径は15.6cmである。

20~21は瓦器の小皿である。(第8図・図版15)

平底の底部から外反しながら口縁部に至るもので、底部内面には幅が1mm以下の細いジグザグ状の暗文が密に施されているもの(20)、丸底ぎみの平底から外反しながら口縁部に至るもので、底部内面には幅が1mm程度のジグザグ状の暗文が粗く施されているもの(21)に分類できる。

22~32は瓦器の椀である。(第8図・図版15)

体部は底部から内湾しながら口縁部に至る。口縁部にはゆるい横ナデ調整を施し、口縁端部は丸く内面には沈線を巡らす。体部外面の中位から口縁部付近に粗いヘラミガキ調整を施し体部内面に



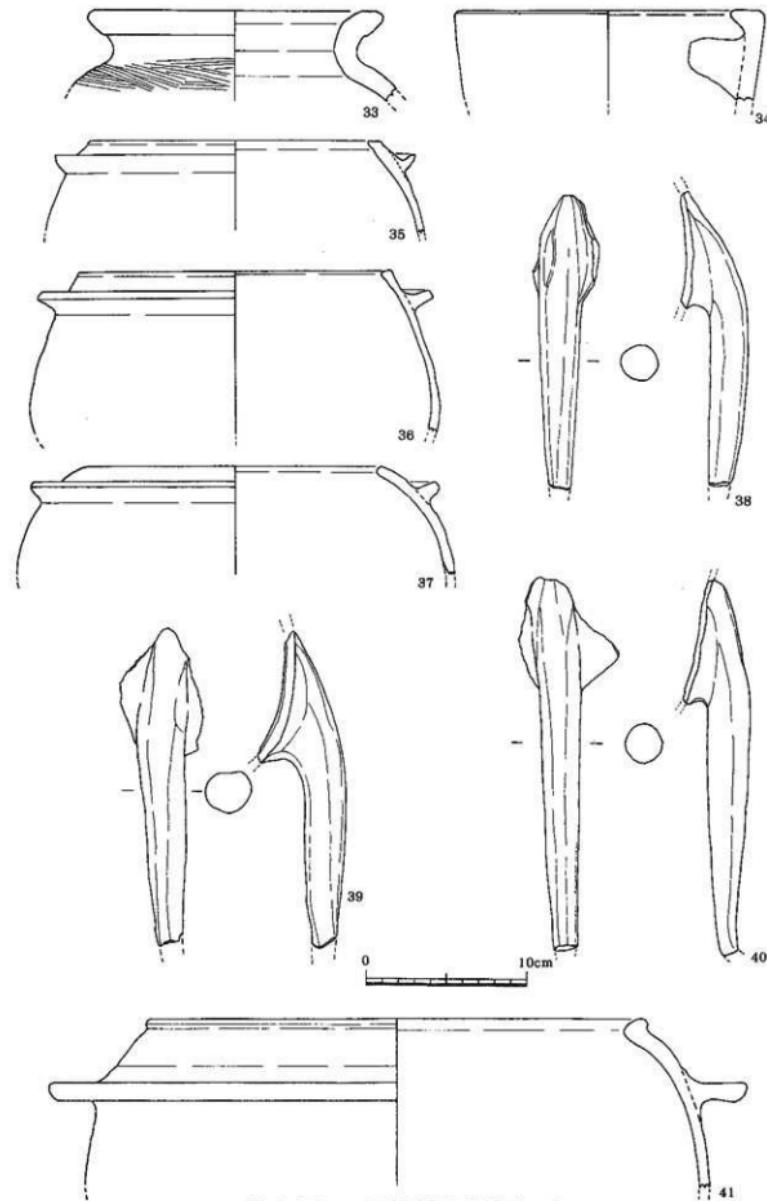
第8図 旧河川出土遺物 1

は幅が1mm程度のヘラミガキ調整を密に施す。高台は低く断面逆三角形を呈するもの(22)、体部は底部から内湾しながら直立ぎみの口縁部に至る。口縁部にはゆるい横ナデ調整を施し、口縁端部は丸く内面には沈線を巡らす。体部外面の中位から口縁部付近に粗いヘラミガキ調整を施し体部内面には幅が1mm程度のヘラミガキ調整を密に施す。高台はやや高く断面逆三角形を呈するもの(23)、体部は底部から内湾しながら直立ぎみの口縁部に至る。口縁部はゆるい横ナデ調整によってわずかに外反し、口縁端部は若干尖りぎみで内面には沈線を巡らす。体部外面は口縁部付近にのみ粗いヘラミガキ調整を施し体部内面には幅が1mm程度のヘラミガキ調整を密に施す。高台は低く断面逆三角形を呈するもの(24)、体部は底部から外上方へ伸び口縁部に至る。口縁部はやや強い横ナデ調整によってわずかに外反し、口縁端部は若干尖りぎみで内面には沈線を巡らす。体部外面は口縁部付近にのみ粗いヘラミガキ調整を施し体部内面には幅が1mm程度のヘラミガキ調整を粗く施す。高台は低く断面逆三角形を呈するもの(25・27)、体部は底部から内湾しながら直立ぎみの口縁部に至る。口縁部はゆるい横ナデ調整によってわずかに外反し、口縁端部は若干尖りぎみで内面には沈線を巡らす。体部外面の中位から口縁部付近に粗いヘラミガキ調整を施し体部内面には幅が1mm程度のヘラミガキ調整を密に施す。高台は低く断面逆三角形を呈するもの(26・28)、体部は底部からやや内湾しながら外上方へ伸び口縁部に至る腰の張ったような形態である。口縁部はゆるい横ナデ調整によってわずかに外反し、口縁端部は若干尖りぎみで内面には沈線を巡らす。体部外面は口縁部付近にのみ粗いヘラミガキ調整を施し、体部内面には幅が1mm以下のヘラミガキ調整を粗く施す。高台は低く断面逆三角形を呈するもの(29)、体部は底部から外上方へ伸び口縁部に至る。口縁部はゆるい横ナデ調整によってわずかに外反し、口縁端部は若干尖りぎみで内面には沈線を巡らす。体部外面は口縁部付近にのみ粗いヘラミガキ調整を施し体部内面には幅が1mm程度のヘラミガキ調整を密に施す。高台は低く断面逆三角形を呈するもの(30)、体部は底部から内湾しながら直立ぎみの口縁部に至る。口縁部にはゆるい横ナデ調整を施し、口縁端部は丸く内面には沈線を巡らす。体部外面にはヘラミガキ調整を施さず、体部内面には幅が1mm以下の細いヘラミガキ調整を粗く施す。高台は低く断面逆三角形を呈するもの(31)、体部は丸底から外上方へ伸び口縁部に至る。いわゆる半球形に近い形態である。口縁部にはゆるい横ナデ調整を施し、口縁端部は尖りぎみで内面には沈線を巡らさない。体部外面にはヘラミガキ調整を施さず体部内面には幅が1mm程度のヘラミガキ調整を螺旋状に粗く施す。高台はないもの(32)に分類できる。

見込み部の暗文は、連結輪状暗文を有するもの(22・23・24・25・26・27・28)、同心円状暗文を有するもの(30・31)があり、独立した暗文をもたないもの(32)、不明のもの(29)もある。炭素の吸着状態については大半が良好であるが、26・27の外面の一部に不良の部分がみられる。

33は須恵器の窓である。(第9図・図版16)

体部外面に平行叩き調整を施し、体部内面には当て具痕と思われるものがみられる。口縁部は外反し、端部は外傾した平面を形成している。口縁端部内面には横ナデ調整によると思われる沈線がみられる。東播系須恵器と思われる。



第9図 旧河川出土遺物 2

34は瓦質の風炉である。(第9図・図版16)

体部はやや外上方に直立し口縁部に至る。口縁端部は内側に張り出し上面は平面を形成している。体部内面の口縁部直下には突起が貼り付けられている。この突起は3方ないし4方に貼り付けられて、上に鍋などを懸けるための支えであると思われる。外面には炭素の吸着がみられるが内面にはみられず、突起の下半部は橙色に変色している。

35~40は瓦質の三足釜である。(第9図・図版16)

体部の下半部に最大径をもつ形態で、口縁端部に浅い沈線を巡らす面をもち鋤は断面三角形を呈し外上方へ短く伸びるもの(35)・鋤が断面台形を呈するもの(36)、体部が球形を呈すると思われ、断面台形の短い鋤が付くもの(37)に分類できる。38~40は脚部である。

41は土師質の羽釜である。(第9図・図版16)

体部は球形を呈するものと思われる。口縁部は内湾し端部はわずかに斜め上方につまみ上げている。鋤は断面U字形を呈し、ほぼ水平に貼り付けられている。河内産のものと思われる。

42は須恵器の环蓋である。(第10図・図版17)

口縁端部にはかえりをもたずゆるやかに天井部へ至り擬宝珠つまみがつく形態であると思われる。

43~45は須恵器の环身である。(第10図・図版17)

高台が付くもの(43・44)と付かないもの(45)に分類できる。それぞれ体部は直線的に外上方へ伸び、口縁端面は丸く納めている。43の高台は44のように接地面が平らではなく斜めになっており、高台の内端面のみが接地する形態である。

46・47は須恵器の环蓋である。(第10図・図版17)

46は天井部から内湾しながらほぼ直下に下がる口縁部をもつ形態で、47は天井部から内湾しながらやや外下方へ開く口縁部をもつ形態である。

48・49は須恵器の妻である。(第10図・図版17)

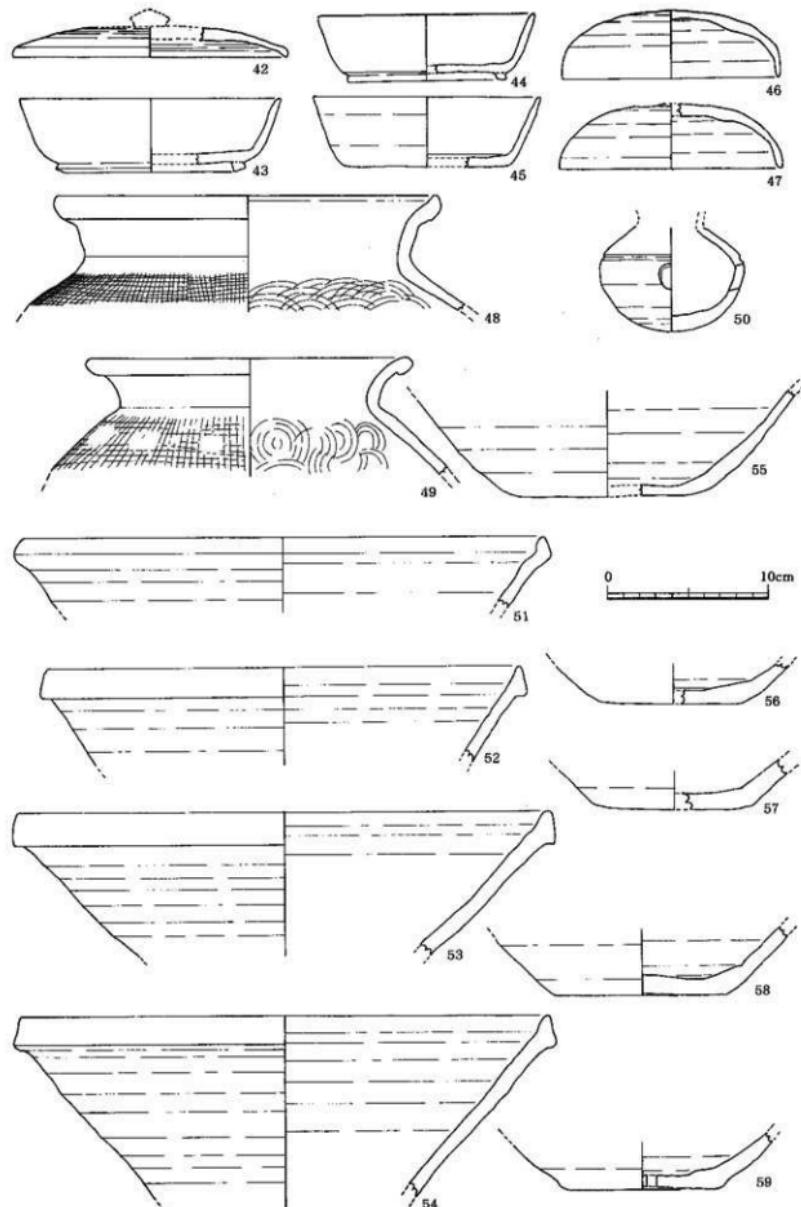
48は体部から頸部がやや外上方に伸び、口縁部は若干肥厚し端部に至る。口縁端部は上方へややつまみ上げられている。体部外面には細かい格子目状の叩き調整、内面には同心円文状の叩き調整が施されている。49は体部から頸部が外上方に伸び、口縁部は玉縁状を呈する。体部外面には格子目状の叩き調整、内面には同心円文状の叩き調整が施されている。外面および口縁部内面に自然釉がみられる。

50は須恵器の妻である。(第10図・図版13-2・図版17)

体部のほぼ中央に最大径をもち、肩部に沈線を巡らす。

51~59は須恵器練鉢である。(第10図・図版18)

体部はほぼ直線的に大きく外上方に開く形態であると思われ、口縁端部が内側へつまみ上げられ、それによって口縁部の内側に凹線がみられるもの(51)、体部はほぼ直線的に大きく外上方に開く形態であると思われ、口縁部の内側に凹線がみられず口縁端部の下端が若干下方へ伸びているもの(52)、体部はほぼ直線的に大きく外上方に開く形態である。口縁端部は上方へつまみ上げられ、



第10図 旧河川出土遺物 3

それによって口縁部の内側に凹線がみられる。口縁端部の下端は若干下方へ伸びているもの（53・54）に分類できる。53・54は体部内面の上半部にナメ方向のナデが残っているが、下半部に近いところは使用によると思われる磨減痕がみられる。4点とも口縁部外面に自然釉がかかっていることから、口縁部を下に向けて重ね焼きしたと思われる。55～59は底部である。55～58は底部と体部との境は若干の稜をもつが丸味をもっている。58の底部外面には糸切り痕が一部残っている。内面は使用による磨減痕がみられ、55・56・58の内面は滑らかであるが、57は焼成がややあまいためかざらざらしている。

59は須恵器縦鉢の底部と思われるが、底部のほぼ中央に一ヶ所焼成前にあけられた孔がある。底部と体部との境には若干の括れをもち、底部の外表面は黒変している。

60は土師器の高杯である。（第11図・図版17）

坏部は欠損している。脚部はやや外下方へ開きながら下がり、裾部付近でさらに外下方へ開き接地部に至る。裾部には波状文が施されている。

61～67は土師器の把手である。（第11図・図版19）

根元は幅広く先端に向かって狭くなり、側面からみると斜め上方に向けて反っている。断面形態は梢円形で上部が凹んでいるもの（61・62・63）、根元から先端まではほぼ同じ幅で、側面からみると斜め上方に向けて反っている。断面形態は円形で上部に切り込みがあるもの（64）、根元から先端まではほぼ同じ幅で、側面からみると若干斜め上方に向けて伸びている。断面形態は円形のもの（65）、根元は幅広く先端に向かって狭くなり、側面からみると先端部が若干斜め上方に向けて反っている。断面形態は円形で中空のもの（66）、根元は非常に幅広く先端に向かって極端に狭くなり、両側面が裏側に折り返されている。側面からみると先端部が若干斜め上方に向けて反っており、断面形態は扁平で上部が凹んでいるもの（67）に分類できる。61～65・67は鍋か瓶の把手と思われ、66は移動式竈の把手の可能性があると考えておきたい。

68・69は移動式竈である。（第11図・図版19）

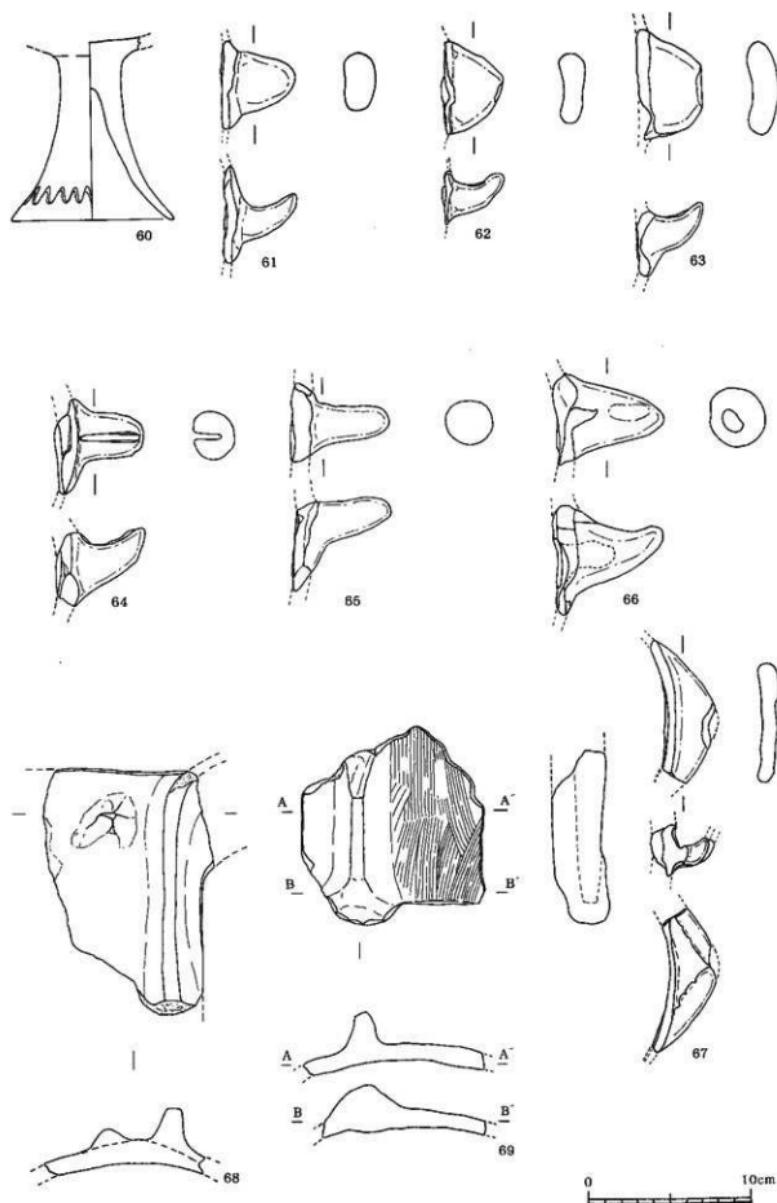
68は竈の上部（掛け口）の破片である。外表面には短い底を貼り付けており、その外側には把手の退化したものとも思われる小さな粘土塊を貼り付けている。内面には一部に横ハケメ調整が残っている。底の内側・掛け口・内面の掛け口に近いところに煤の付着がみられ、使用されていたことがわかる。69は移動式竈の下部（脚部）の破片である。外表面は縱ハケメ調整、内面は横ハケメ調整を施している。

70～92は貿易陶磁器である。（第12図・図版20・21）

70は青白磁印花蓮弁文小壺の蓋である。外表面は施釉され、内面は無釉で短いかえりが貼り付けられている。（図版13-5）

71～74は青磁碗の口縁部の小片である。外表面に鍋蓮弁文を有するもの（71・72）、外表面に蓮弁文を有するもの（73）、内面に劃花文を有するもの（74）に分類できる。龍泉窯系の製品と思われる。

75・76は青磁碗の底部の小片である。高さが低い削り出し高台で、高台骨付部の幅が比較的広い。



第11図 旧河川出土遺物 4

77・78は青磁皿の小片である。底部が厚く、外面は底部付近からゆるやかに外上方へ伸びる口縁部へ至るが、内面は平らな底部から屈曲して外上方へ伸びる口縁部に至り、内外面に文様がないもの（77）、平底の底部からゆるやかに内湾し外方へ伸びる口縁部へ至り、内面に櫛描き文を有するもの（78）に分類できる。同安窯系の製品と思われる。

79～83は白磁碗の口縁部の小片である。79～82の口縁端部は玉縁状を呈する。83は端反碗の口縁部で、内面の口縁下に1条の沈線が巡っている。

84・85は白磁皿の底部の小片である。やや上げ底ぎみの平底で、底部外面は無釉であり、内面は施釉されており底部と口縁部の境に浅い沈線を有するもの（84）、平底で底部外面は無釉であり、内面は施釉されており底部と口縁部の境に浅い沈線を有するもの（85）に分類できる。2点とも口禿の小皿の底部であると思われる。

86～92は白磁碗の底部の破片である。高さが高い削り出し高台で、高台疊付部の幅が比較的広いもの（86）、高さが高い削り出し高台で、高台疊付部の幅が比較的狭いもの（87・88）、高さが低い削り出し高台で、高台疊付部の幅が比較的広いもの（89・90・92）、高さが低い削り出し高台で、高台疊付部の幅が比較的狭いもの（91）に分類できる。また内面の特徴からは、底部と体部の境に沈線を有するもの（88・89・90・91）と無いもの（86・87・92）に分類できる。

93は綠釉陶器碗の高台部の小片である。（第12図・図版20）

底部外面以外の全面に濃緑色の釉薬が施されている。底部外面には糸切り痕が残り、高台は疊付部の幅が比較的狭く高さの高い有段輪高台を貼り付けている。底部内面には1条の沈線が巡り、墨のようなものが付着している。近江産の製品と思われる。

94～98は石製品類である。（第12図・図版21・22）

96は滑石製の石鍋の小片である。内湾ぎみの体部の口縁部直下に断面三角形の鶴を削り出している。体部外面に煤の付着が若干みられる。

94は有舌尖頭器である。法量・重さは、長さ（残存）9.8cm・最大幅2.7cm・最大厚0.9cm・重さ23.4gを測る。平面形態は逆三角形の短い茎部を有する柳葉形である。サヌカイト製である。（図版13-3）

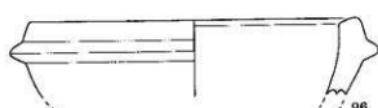
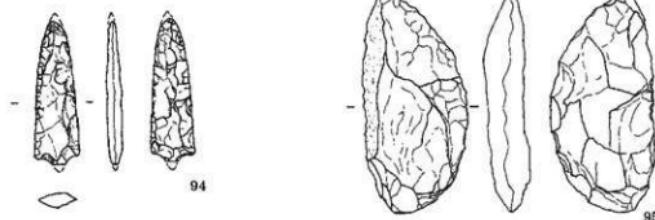
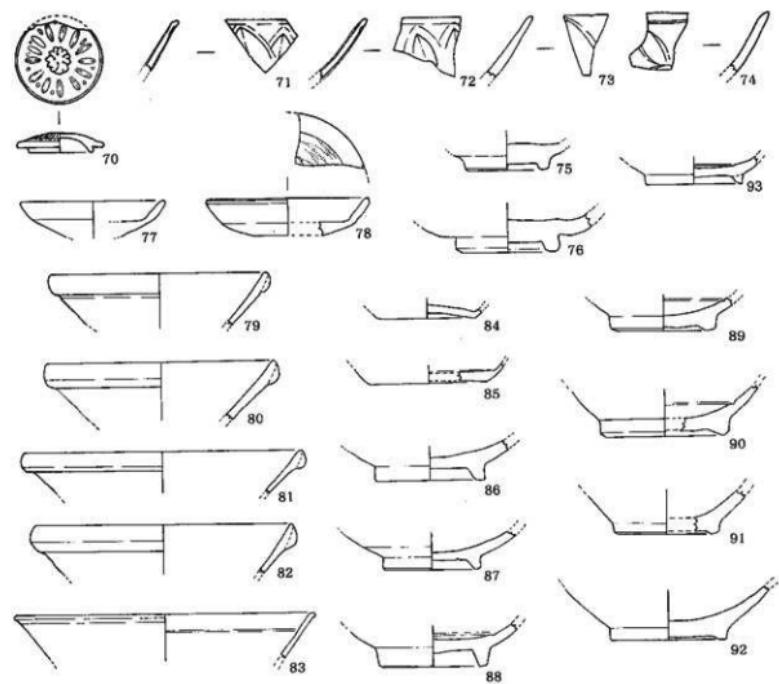
95は不定形刃器である。法量は長さ13.4cm・最大幅6.3cm・最大厚2.3cmを測る。サヌガイト製である。（第7図-6・図版12-6）

97は石錐である。法量・重さは、長さ3.3cm・最大幅1.4cm・最大厚0.7cm・重さ2.2gを測る。サヌカイト製である。（第7図-4・図版12-4）

98は凹基式の打製石鎌である。法量・重さは、長さ2.1cm・最大幅1.4cm・最大厚0.2cm・重さ0.6gを測る。平面形態は二等辺三角形で、基辺に2mmの抉りが入る。サヌカイト製である。

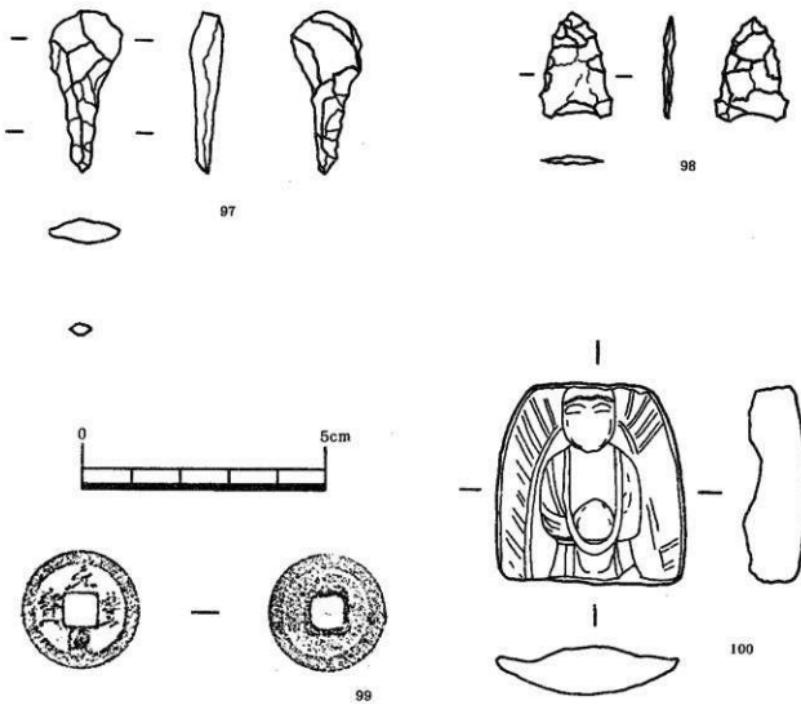
99は錢貨である。（第7図-3・図版12-3・図版22）

元豊通寶（行書体） 元豊元年（1078年）初鋤の北宋錢である。外径2.4cm・内径1.9cm・重さ3gである。



0 10cm

第12図 旧河川出土遺物 5



第13図 旧河川出土遺物 6

100は土製の仏像である。(第13図・図版13-4・図版22)

型づくりによるもので、頭部や下半身は欠損しているが、光背や衣の文様は残っている。

101・102は木製の下駄である。(第7図-2・5・第14図・図版12-2・5・図版22)

101は全体の約半分と前歯が欠損している。法量は、長さ(残存)21.2cm・最大幅(残存)7.6cm・厚さ(残存)1.1cm・歯の高さ2.2cmを測る。連歯の下駄である。

102は全体の約半分が欠損している。法量は、長さ(残存)21.3cm・最大幅(残存)4.5cm・厚さ(残存)1.2cm・歯の高さ0.9cmを測る。連歯の下駄である。歯が著しく磨滅している。

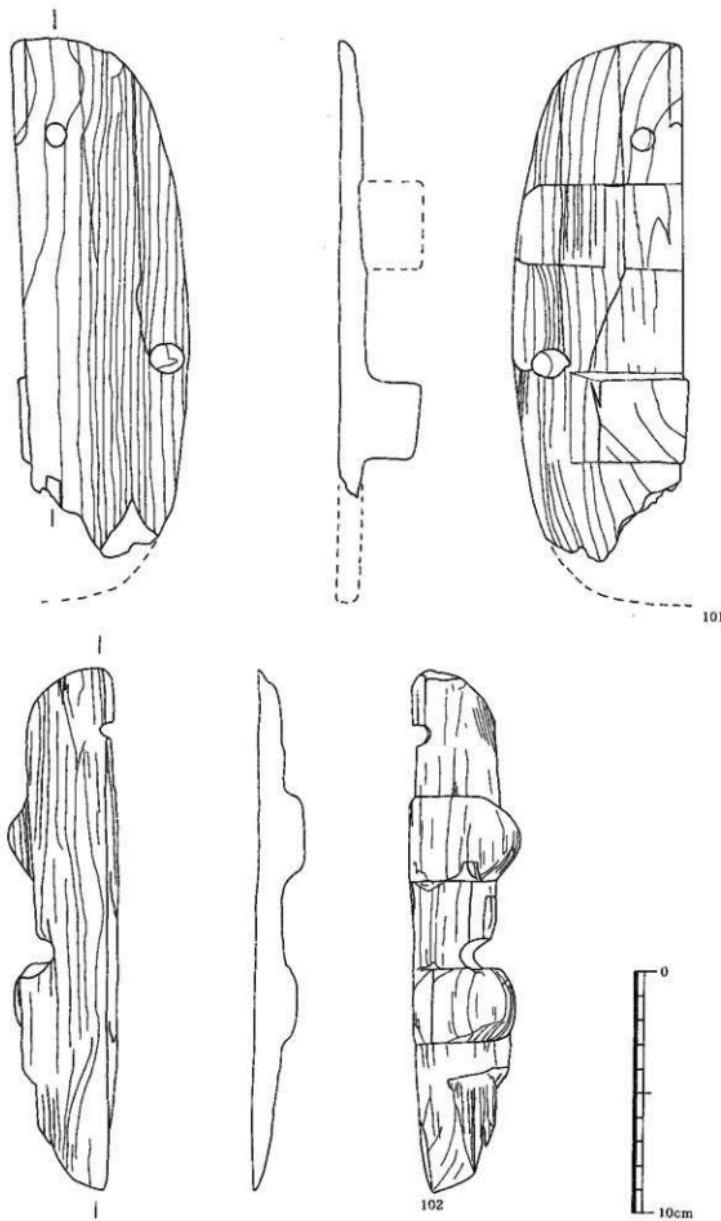
103~107は瓦類である。(第15・16図・図版23)

103は平瓦で、凹面には布目痕が残っており、凸面には格子目の叩き調整が施されている。

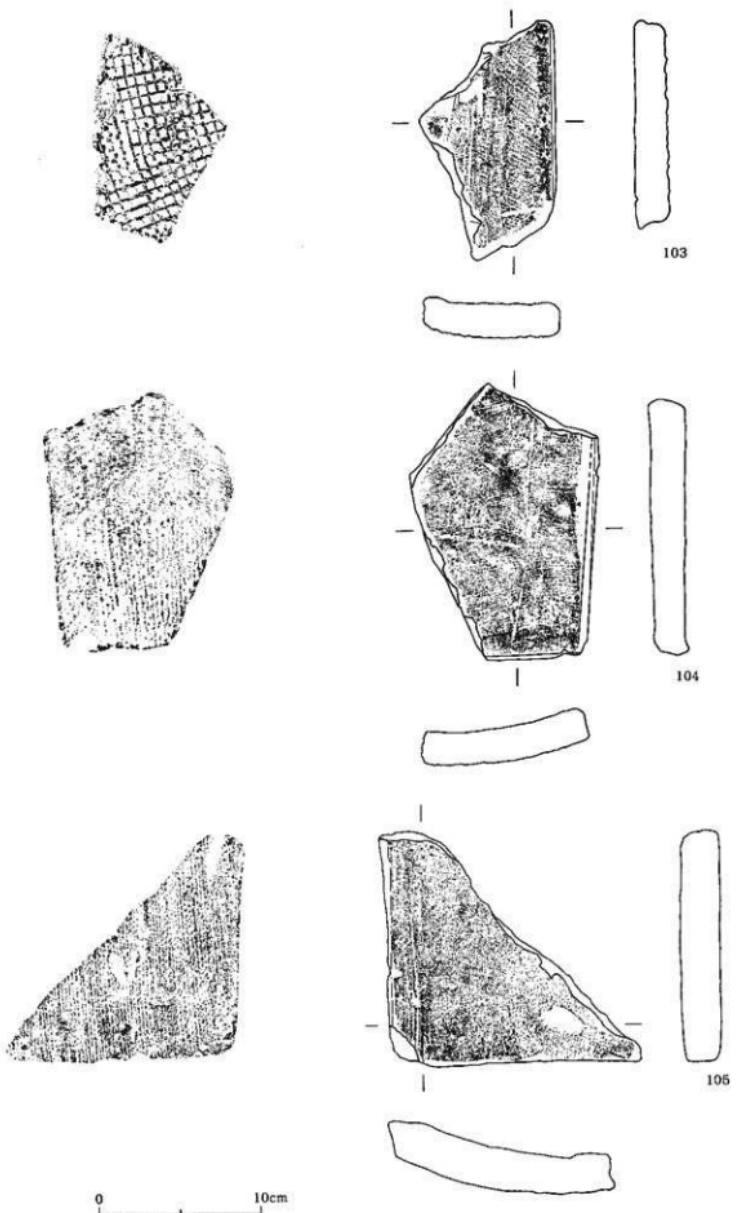
104・105は平瓦で、凹面には布目痕が残っており、凸面には縄目の叩き調整が施されている。

106は平瓦で、凹面には103よりも大きな格子目叩き調整が施されている。燃し瓦である。

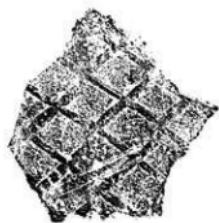
107は丸瓦で、凸面はナデ調整が施され、凹面には布目痕が残っている。



第14図 旧河川出土遺物 7



第15図 旧河川出土遺物 8



●溝出土遺物

108~111は土師器の小皿である。(第7図-7・第17図・図版13-1・図版24)

平底の底部からやや内湾ぎみに短い口縁部に至るもの、内面に朱色の付着物がみられる(108)、平底の底部から口縁部が外上方へ伸びるもの(109)、平底の底部から口縁部が外上方へ短く伸びるもの(110)、平底ぎみの底部からやや外反する口縁部に至るもの(111)に分類できる。口径は10cm未満で、器高は2cm未満のものである。

112~114は土師器の中皿である。(第7図-7・第17図・図版13-1・図版24)

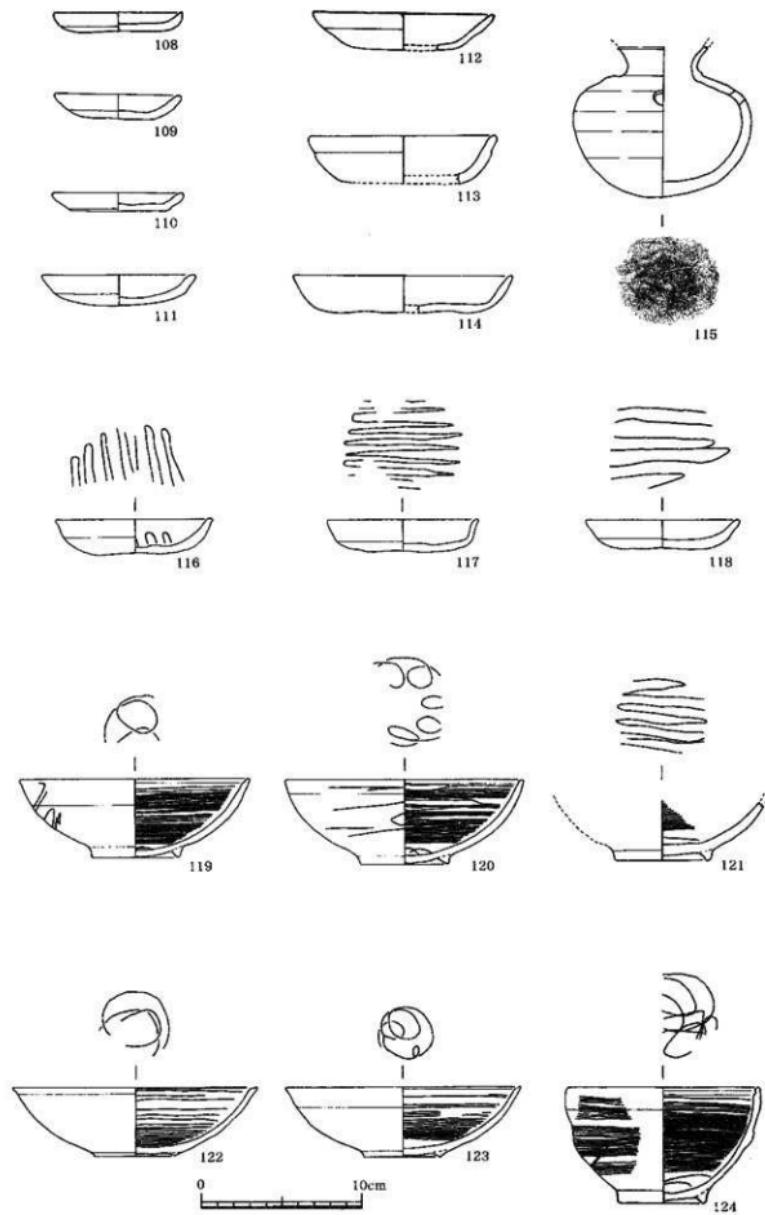
平底の底部から体部が逆八の字形に大きく開き、口縁端部が丸く納まるもの(112)、平底の底部から体部が外上方へ伸び、体部と口縁部の境に強い横ナデによる段がみられるもの(113)、平底の底部から外上方へ伸び口縁部に至るもの(114)に分類できる。口径は15cm以下で、器高は3cm以下のものである。

116~118は瓦器の小皿である。(第17図・図版24)

平底の底部から外上方へ伸びながら口縁部に至り、口縁端部が若干外反し、底部内面には幅が1mm程度のジグザグ状の暗文が密に施されているもの(116)、平底の底部から口縁部がほぼ垂直に立ち上がり口縁端部が若干外反し、底部内面には幅が1mm程度のジグザグ状の暗文が密に施されているもの(117)、平底の底部から外上方へ伸びながら口縁部に至り、口縁端部が若干外反し、底部内面には幅が1mm程度のジグザグ状の暗文が粗く施されているもの(118)に分類できる。116・117は炭素の吸着状態が不良である。

119~124は瓦器の檐である。(第17図・図版25)

体部は底部から内湾しながら直立ぎみの口縁部に至る。口縁部はゆるい横ナデ調整によってわずかに外反し、体部外面の中位から口縁部付近に粗いヘラミガキ調整を施し体部内面には幅が1mm程度のヘラミガキ調整を密に施す。口縁端部は丸く納まり内面には沈線を巡らす。高台は高く、断面逆三角形を呈するもの(119)、体部は底部から内湾しながら口縁部に至る。口縁部にはゆるい横ナデ調整を施し、体部外面の中位から口縁部付近には粗いヘラミガキ調整を施し体部内面には幅が1mm程度のヘラミガキ調整を密に施す。口縁端部は丸く納まり内面には沈線を巡らす。高台はやや高く、断面逆三角形を呈するもの(120)、体部は底部から内湾しながら口縁部に至ると思われる。体部外面の下位にヘラミガキ調整がみられることから全面にヘラミガキ調整を施していると思われる。体部内面には幅が1mm程度のヘラミガキ調整を密に施す。高台は高く、断面台形を呈するもの(121)、体部は底部から大きく外上方へ伸び口縁部に至る。口縁端部は若干尖りぎみで、強い横ナデ調整によって外反し内面には沈線を巡らす。体部外面は口縁部付近にのみわずかに粗いヘラミガキ調整を施し体部内面には幅が1mm程度のヘラミガキ調整を粗く施す。高台は低く、断面逆三角形を呈するもの(122)、体部は底部から外上方へ伸び口縁部に至る。口縁部はゆるい横ナデ調整によってわずかに外反する。体部外面は口縁部付近にのみわずかに粗いヘラミガキ調整を施し体部内面には幅が1mm程度のヘラミガキ調整を密に施す。口縁端部は若干尖りぎみで内面には沈線を巡



第17図 溝出土遺物

らす。高台は低く、断面逆三角形を呈するもの（123）、体部は底部からやや内湾しながら上方へ伸び口縁部に至るコップ状の形態を呈する。口縁部は横ナデ調整が施され、体部外面は全面にやや密なヘラミガキ調整を施し、体部内面には幅が1mm程度のヘラミガキ調整を密に施す。口縁端部は丸く納まり内面には沈線を巡らす。高台は高く、断面台形を呈するもの（124）に分類できる。見込み部の暗文は、連結輪状暗文を有するもの（119・120）、ジグザグ状暗文を有するもの（121）、同心円状暗文を有するもの（122・123）、不整形の暗文を有するもの（124）がある。また124は炭素の吸着がみられない。

115は須恵器の壺である。（第17図・図版13-6・図版24）

体部は、肩部に最大径をもつ橢円形を呈する。頸部は短く、口縁部下に稜をもつ。口縁部は欠損しているが、短く逆八の字形に大きく広がる形態を呈すると思われる。底部外面には「井」状のヘラ記号がある。

125～130は貿易陶磁器である。（第18図・図版25）

125は青磁合子の身である。底部と受け部以外は施釉されている。龍泉窯系の製品と思われる。

126は青磁碗の底部の破片である。高さが低い削り出し高台で、高台疊付部の幅は比較的広い。

127～129は白磁碗の口縁部の小片である。口縁端部は玉縁状を呈する。

130は白磁碗の底部の破片である。高さが高い削り出し高台で、高台疊付部の幅は比較的狭い。

131は均整唐草文軒平瓦の瓦当部分である。（第18図・図版26）頸は直線的である。

132・133は瓦質の三足釜の脚部である。（第18図・図版24）132は裏側、133は全体的に炭素の吸着状態が不良である。

134・135は砥石である。（第18図・図版26）134は長方形を呈する。二面に使用した痕跡が認められ、そのうち一面には浅い溝状の凹みがある。135は長方形の両側面が凹んでいる形態である。四面とも使用した痕跡が認められる。

●土坑出土遺物（第18図・図版26）

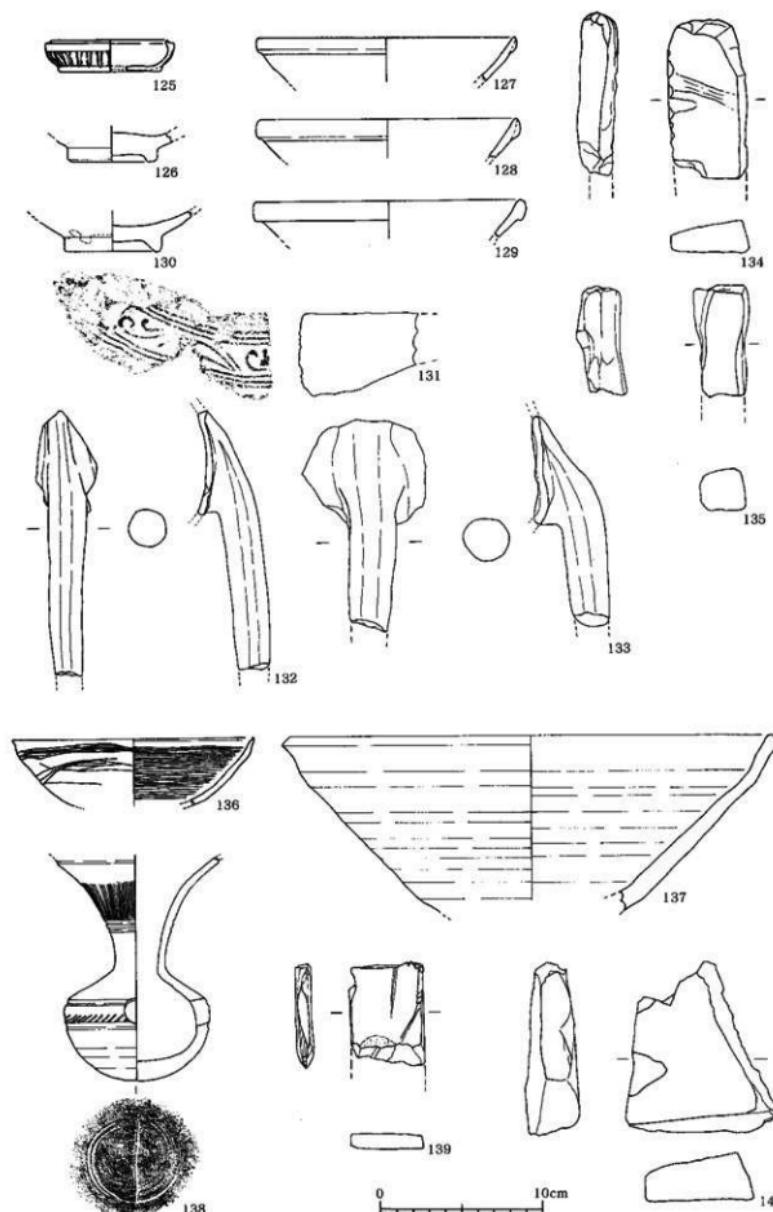
136は瓦器の椀である。体部は底部から内湾しながら口縁部に至る形態と思われる。口縁部にはゆるい横ナデ調整を施し、口縁端部は尖りぎみで内面には沈線を巡らす。体部外面の中位から口縁部付近には粗いヘラミガキ調整を施し体部内面には幅が1mm程度のヘラミガキ調整を密に施す。

137は須恵器練鉢である。体部はほぼ直線的に大きく外上方に開き、口縁端部の外面に凹線がみられ、口縁端部が若干張り出している。

●包含層出土遺物（第18図・図版26）

138は須恵器の壺である。体部は肩部をもち、細い頸部から口縁部が大きく開く形態である。胴部には2条の沈線を巡らしその間に刺突文を施し、頸部には2条の沈線を巡らし口縁部下には柳描き文が施されている。底部外面には「×」状のヘラ記号がある。

139・140は砥石である。139は長方形を呈し二面に使用した痕跡が認められる。140は不整形で二面に使用した痕跡が認められる。



第18図 溝・土坑・包含層出土遺物 (125~135: 溝、136~137: 土坑、138~140: 包含層)

まとめ

昭和63年度の遺跡発見以来、木間池北方遺跡においての全面発掘調査は、建設省浪速国工事事務所の依頼による平成7年度の第1次発掘調査について今回が第2次発掘調査であった。その第1次発掘調査は今回の調査地区の西側に隣接している。発掘調査の結果報告については今後まとめる予定をしているが、その検出した主な遺構は古墳1基とそれを削平して嘗まれた奈良時代から中世にかけての集落跡であった。以下、その点もふまえて要点について述べまとめておきたい。

今回の発掘調査において最も多くの遺物が出土したのは旧河川からであった。時代的には縄文時代草創期の有舌尖頭器・縄文時代の石器類、古墳時代後期の須恵器・土師器、奈良時代の須恵器、平安時代の土器、鎌倉時代の土器・陶磁器類であった。次に多くの遺物が出土したのは溝からで、古墳時代中期の埴・奈良時代の均整唐草文軒平瓦や若干古い様相を示すと思われる瓦器碗のぞいてはほとんどが鎌倉時代の土器・陶磁器類であった。

旧河川の出土遺物を観ると様々な時代のものが混在していることがわかる。しかし縄文時代に関しては、その時代の遺物が他のものと同じ土層から出土しているという状況や出土遺物の全体量から考えるとその遺物のしめる割合が低いという状況から、周辺地域において縄文時代の遺構が発見されていない現段階においては、それらの遺物の出土をもってただちに旧河川が縄文時代に存在していたと述べるには早計であると考える。古墳時代や奈良時代・平安時代に関しては、前述したとおり西隣での建設省浪速国工事事務所の依頼による第1次発掘調査で多くの遺構を検出していることから、旧河川もそれらの時代に存在していた可能性を考えておきたい。以上、現段階で旧河川は最も多くの遺物が出土した鎌倉時代（特に13世紀前半代）を中心とした時期のものではあるが、周囲の状況から古墳時代・奈良時代や平安時代に存在していた可能性も含めてこの遺構の時期を考えておきたい。また溝に関しては、古墳時代中期の埴・奈良時代の均整唐草文軒平瓦や若干古い様相を示すと思われる瓦器碗を除いては、掲載していないものを含めて旧河川と同じく鎌倉時代（特に13世紀前半代）を中心とした時期の遺物が多く出土していることから、旧河川と同様に考えておきたい。

以上今回の調査地区では鎌倉時代（特に13世紀前半代）を中心とした時期の遺構を検出した。旧河川については自然河川で、周囲の地形からその右岸はこの遺跡が立地する生駒山系から西へ派生している段丘の南端にあたると考えられる。溝については地形に沿ったものではなく、また直線的な平面形態から人工的の溝であると考えられる。またその性格については前述したとおり、溝の西側には集落跡が拡がっているが東側においては遺構の密度が極端に少ないとから、その集落跡の境界を示すようなものではないかと考える。ただし東側については、発掘調査の対象範囲が狭かった点や宅地等により攪乱を受けていた点から集落跡の有無についての結論は今後の調査を待ちたい。

遺物観察表

遺構名	種類	持國番号 國版番号	器形	法量(cm) 口径 高 度 【推定】 〔残高〕	色調	胎土 素 質 砂 粒	調整・手法		残存度	備考
							外面	内面		
旧河川	土師器	8-1 14-1	皿	[7.2] 1.4	浅黄褐色 (7.5YR8/4)	緻密	口:ヨコナデ 底:ナデ 指頭痕	口:ヨコナデ 底:ナデ	1/3	
		8-2 14-2	皿	7.6 1.7	に赤い 黄褐色 (10YR7/3)	緻密	口:ヨコナデ 底:ナデ 指頭痕	口:ヨコナデ 底:ナデ	完形	
		8-3 14-3	皿	8.0 1.6	に赤い 黄褐色 (10YR7/2)	緻密 1mm以下の砂粒 と金雲母を含む	口:ヨコナデ 底:ナデ	口:ヨコナデ 底:ナデ	ほぼ 完形	
		8-4 14-4	皿	8.3 1.4	灰黄色 (2.5Y7/2)	1mm以下の砂粒 を若干と金雲母 を含む	口:ヨコナデ 底:ナデ	口:ヨコナデ 底:ナデ	完形	
		8-5 14-5	皿	8.2 1.5	浅黄褐色 (10YR8/3)	緻密	口:ヨコナデ 底:ナデ	口:ヨコナデ 底:ナデ	3/4	
		8-6 14-6	皿	8.6 1.6	に赤い 黄褐色 (7.5YR7/4)	緻密 3mm以下の砂粒 と金雲母を含む	口:ヨコナデ 底:ナデ 指頭痕	口:ヨコナデ 底:ナデ	ほぼ 完形	
		8-7 14-7	皿	7.8 1.6	に赤い 黄褐色 (10YR7/3)	緻密 1mm以下の砂粒 若干と金雲母を 含む	口:ヨコナデ 底:ナデ	口:ヨコナデ 底:ナデ	4/5	
		8-8 14-8	皿	8.2 1.4	灰黄色 (2.5Y7/2)	緻密 1mm以下の砂粒 若干と金雲母を 含む	口:ヨコナデ 底:ナデ	口:ヨコナデ 底:ナデ	完形	
		8-9 14-9	皿	[8.4] 1.5	浅黄褐色 (10YR8/3)	緻密 1mm以下の砂粒 若干と金雲母を 含む	口:ヨコナデ 底:ナデ	口:ヨコナデ 底:ナデ	1/4	
		8-10 14-10	皿	8.1 1.5	浅黄褐色 (7.5YR8/4)	緻密 2mm以下の砂粒 と金雲母を含む	口:ヨコナデ 底:ナデ	口:ヨコナデ 底:ナデ	ほぼ 完形	
		8-11 14-11	皿	8.8 1.6	に赤い 黄褐色 (10YR7/3)	緻密 1mm以下の砂粒 と金雲母を若干 含む	口:ヨコナデ 底:ナデ 指頭痕	口:ヨコナデ 底:ナデ	5/6	

遺構名	種類	博物館番号 図版番号	器形	法量(cm) 口幅 高さ 厚さ [推定] [残高]	色調	胎土 素質 砂粒	調整・手法		残存度	備考
							外面	内面		
旧河川	土師器	8-12 14-12	皿	8.7 1.3	に赤い 黄褐色 (10YR7/3)	緻密 1mm以下の砂粒 若干と金雲母を含む	口:ヨコナデ 底:ナデ 指押痕	口:ヨコナデ 底:ナデ	完形	底部に2 ヶ所穿孔
		8-13 14-13	皿	9.6 2.5	灰褐色 (2.5YR7/2)	緻密 2mm以下の砂粒 を含む	口:ヨコナデ 底:ナデ ヘラミガキ	口:ヨコナデ 底:ヘラミガキ	完形	
		8-14 14-14	皿	[12.7] 2.4	浅黄褐色 (7.5YR8/4)	緻密 1mm以下の砂粒 金雲母を若干含む	口:ヨコナデ 底:ナデ	口:ヨコナデ 底:ナデ	1/4	
		8-15 14-15	皿	[14.2] 2.2	に赤い 黄褐色 (10YR7/3)	緻密 1mm以下の砂粒 金雲母を若干含む	口:ヨコナデ 底:指押痕	口:ヨコナデ 底:ナデ	1/4	
		8-16 14-16	皿	[14.6] 2.3	に赤い 黄褐色 (10YR7/3)	緻密 2mm以下の砂粒 と金雲母を含む	口:ヨコナデ 底:ナデ	口:ヨコナデ 底:ナデ	1/3	内面底部 に炭化物 付着
		8-17 14-17	皿	13.8 3.1	に赤い 黄褐色 (10YR7/2)	やや密 4mm以下の砂粒 をやや多く含む	口:ヨコナデ 底:ナデ	口:ヨコナデ 底:ナデ	3/4	
		8-18 14-18	皿	[14.0] 2.8	浅黄褐色 (10YR8/4)	緻密 2mm以下の砂粒 と金雲母を含む	口:ヨコナデ 底:ナデ	口:ヨコナデ 底:ナデ	1/4	
		8-19 14-19	皿	[15.6] 2.2	灰黄褐色 (10YH6/2)	緻密 1mm以下の砂粒 と金雲母を含む	口:ヨコナデ 底:ナデ	口:ヨコナデ 底:ナデ	1/4	内面に炭 化物付着
		8-20 15-20	皿	9.2 1.5	灰色 (N5/)	緻密 2mm以下の砂粒 を若干含む	口:ヨコナデ 底:指押え	口:ヨコナデ 底:ナデ	ほぼ 完形	ジグザグ 状暗文
瓦器		8-21 15-21	皿	8.8 1.5	灰色 (N5/)	緻密	口:ヨコナデ 底:指押え	口:ヨコナデ 底:ナデ	1/6	ジグザグ 状暗文
		8-22 15-22	椀	[14.6] 5.1 4.2	暗灰色 (N3/)	緻密	口:ヨコナデ 底:ナデ 粗ヘラミガキ	口:ヨコナデ 底:ナデ 密ヘラミガキ	1/2	連結輪状 暗文

遺構名	種類	挿図番号 図版番号	器形	法量(cm) 口 器 高 底 〔推定〕 〔推算〕	色調	胎土質 素砂粒	調整・手法		残存度	備考
							外面	内面		
旧河川	瓦器	8-23 15-23	椀	[13.4] 5.7 [6.6]	灰色 (N4/)	緻密	口:ヨコナデ 体:ナデ ヘラミガキ	口:ヨコナデ 体:ナデ ヘラミガキ	1/3	連結輪状暗文
		8-24 15-24	椀	[13.4] 5.1 [6.6]	灰色 (N4/)	緻密	口:ヨコナデ 体:ナデ	口:ヨコナデ 体:ヘラミガキ	1/4	連結輪状暗文
		8-25 15-25	椀	[12.8] 5.0 [4.0]	灰色 (N4/)	緻密	口:ヨコナデ 体:ナデ ヘラミガキ	口:ヨコナデ 体:ナデ ヘラミガキ	1/3	連結輪状暗文
		8-26 15-26	椀	[13.4] 4.4 [4.4]	灰色 (N4/)	緻密 1mm以下の砂粒 を含む	口:ヨコナデ 体:ナデ ヘラミガキ	口:ヨコナデ 体:ヘラミガキ	1/2	連結輪状暗文
		8-27 15-27	椀	14.4 5.0 4.3	灰色 (N4/)	緻密 2mm以下の砂粒 を含む	口:ヨコナデ 体:ナデ ヘラミガキ	口:ヨコナデ 体:根ヘラミガキ	ほぼ 完形	連結輪状暗文
		8-28 15-28	椀	[14.0] 4.6 5.1	灰色 (N4/)	緻密	口:ヨコナデ 体:指押え 根ヘラミガキ	口:ヨコナデ 体:ヘラミガキ	1/2	連結輪状暗文
		8-29 15-29	椀	[12.8] 3.8 [3.0]	暗灰色 (N3/)	緻密	口:ヨコナデ 体:指押え 根ヘラミガキ	口:ヨコナデ 体:根ヘラミガキ	1/3	
		8-30 15-30	椀	13.8 4.4 4.0	灰色 (N4/)	緻密	口:ヨコナデ 体:指押え 根ヘラミガキ	口:ヨコナデ 体:根ヘラミガキ	ほぼ 完形	同心円状暗文
		8-31 15-31	椀	[13.8] 4.5 5.6	暗灰色 (N3/)	緻密	口:ヨコナデ 体:ナデ	口:ヨコナデ 体:根ヘラミガキ	3/4	同心円状暗文
		8-32 15-32	椀	9.1 3.7	灰色 (N4/)	緻密	口:ヨコナデ 体:指押え	口:ヨコナデ 体:根ヘラミガキ	完形	
		9-33 16-33	甕	[18.3] (5.5)	灰色 (N6/)	粗 砂粒、小石を多 く含む	口:ヨコナデ 体:手印		口縁 1/4	東播系

造 構 名	種 類	挿図 番号 図版 番号	器 形	法量(cm) 口 巻 高 經 [推定] [推高]	色 調	胎 土 素 質 砂 粒	調整・手法		残存度	備 考
							外 面	内 面		
旧河川	瓦質土器	9-34 16-34	風炉	[19.1] (5.5)	外:暗灰色 (N3/4) 内:ぶい 黄褐色 (10YR7/4)	粗	ナデ	ナデ	小片	
		9-35 16-35	三足釜	[18.0] (5.7)	暗灰色 (N3/4)	緻密	口:ヨコナデ 体:ナデ	口:ヨコナデ 体:ナデ	口縁 1/3	体部外面 に焼付着
		9-36 16-36	三足釜	[19.2] (10.0)	暗灰色 (N3/4)	緻密	口:ヨコナデ 体:ナデ	口:ヨコナデ 体:ナデ	口縁 1/6	外面に焼 内面に炭化物付着
		9-37 16-37	三足釜	[18.0] (6.6)	暗灰色 (N3/4)	緻密	口:ヨコナデ 体:ナデ	口:ヨコナデ 体:ナデ	口縁 1/4	体部外面 に焼付着
		9-38 16-38	三足釜 脚部	(18.0)	暗灰色 (N3/4)	緻密	ナデ			焼付着
		9-39 16-39	三足釜 脚部	(19.5)	暗灰色 (N3/4)	緻密				焼付着
		9-40 16-40	三足釜 脚部	(22.9)	暗灰色 (N3/4)	緻密				焼付着
		9-41 16-41	羽釜	[30.9] (10.2)	ぶい 黄褐色 (10YR5/3)	粗	口:ヨコナデ 体:ナデ	ナデ	口縁 1/4	焼付着
		10-42 17-42	坏蓋	[16.9] (1.8)	灰色 (N6/4)	緻密	回転ナデ	回転ナデ	1/4	
		10-43 17-43	坏身	[16.2] 4.5 [10.4]	灰色 (N6/4)	緻密	回転ナデ	回転ナデ	1/4	
		10-44 17-44	坏身	[13.4] 4.1 [9.8]	灰色 (N6/4)	緻密	回転ナデ	回転ナデ	1/4	
土師質土器										
須恵器										

造橋名	種類	押圧番号 図版番号	器形	法量(cm) 口 高 底 基 底 [推定] [推高]	色調	胎土 素質 砂粒	調整・手法		残存度	備考
							外 面	内 面		
旧河川	須恵器	10-45	坏身	[14.0] 4.3 [10.2]	灰白色 (7.5Y7/1)	緻密 1mm以下の砂粒を含む	回転ナデ	回転ナデ	1/4	
		17-45	坏蓋	[13.4] (4.2)	灰色 (N6/)	緻密 2mm以下の砂粒を含む	回転ヘラケズリ	回転ナデ	1/4	
		10-47	坏蓋	[13.7] (4.0)	灰色 (N5/)	緻密 2mm以下の砂粒を含む	回転ヘラケズリ	回転ナデ	1/2	
		17-47	壺	[23.9] (7.1)	灰白色 (N7/)	緻密 1mm以下の砂粒を含む	口:回転ナデ 体:格子目叩き	口:回転ナデ 体:同心円文叩き	口縁 1/5	
		10-48	壺	[20.2] (7.2)	黄灰色 (2.5Y5/1)	緻密 4mm以下の砂粒を含む	体:格子目叩き	体:同心円文叩き	口縁 1/5	外面と口縁内面に自然釉
		17-49	甌	(6.3)	灰色 (N5/)	やや密 3mm以下の砂粒を多く含む	回転ヘラケズリ			
		10-50	甌	(6.3)	灰色 (N5/)	やや密 3mm以下の砂粒を多く含む				
		16-51	練鉢	[32.0] (4.4)	灰色 (N6/)	やや粗 砂粒、小石を含む	回転ナデ	ナデ	口縁 1/6	東播系
		16-52	練鉢	[29.2] (5.9)	灰色 (N6/)	やや粗 小石、砂粒を含む	回転ナデ	ナデ	口縁 1/5	東播系
		16-53	練鉢	[33.0] (8.8)	灰色 (N6/)	やや粗 小石、砂粒を含む	回転ナデ	ナナメ方向のナデ	口縁 1/6	東播系
		16-54	練鉢	[32.6] (11.1)	灰色 (N6/)	やや粗 小石、砂粒を含む	回転ナデ	ナナメ方向のナデ	1/4	東播系
		16-55	練鉢	(6.4) [10.9]	灰色 (N6/)	やや粗 小石、砂粒を含む	ヨコナデ	ヨコナデ	底部 1/4	東播系

遺構名	種類	擲出番号 図版番号	器形	法量 (cc) 口器 器底 [推定] 〔推定〕 〔推定〕	色調	胎土 素質 砂粒	調整・手法		残存度	備考
							外 面	内 面		
旧河川	須恵器	10-56	鍊鉢	(2.4) [8.9]	灰色 (N6/)	やや粗 小石、砂粒を含む	ヨコナデ	ヨコナデ	底部 $\frac{1}{3}$	東播系
		10-57	鍊鉢	(3.1) [9.6]	灰色 (N6/)	やや粗 小石、砂粒を含む	ヨコナデ	ヨコナデ	底部 $\frac{1}{2}$	東播系
		18-57								
		10-58	鍊鉢	(4.1) [10.4]	灰色 (N6/)	やや粗 小石、砂粒を含む	ヨコナデ	ヨコナデ	底部 $\frac{1}{2}$	東播系
		18-58								
		10-59	鍊鉢	(3.3) [9.2]	黄褐色 (2.5YR8/1)	やや粗 小石、砂粒を含む	ヨコナデ	ヨコナデ	底部 $\frac{1}{2}$	底盤以外 面黒変 底盤中央 に1ヵ所 穿孔
		18-59								
	土師器	11-60	高坏	(11.1) [10.0]	にぶい 橙色 (7.5YR7/4)	緻密 2mm以下の砂粒 を含む	ナデ	ナデ	脚部	
		17-60								
		11-61	把手		橙色 (5YR7/8)	緻密 2mm以下の砂粒 と金雲母を含む				
		19-61								
		11-62	把手		淡褐色 (2.5Y7/3)	緻密 2mm以下の砂粒 と金雲母を含む				
		19-62								
		11-63	把手		浅黄褐色 (7.5YR8/6)	やや密 3mm以下の砂粒 を多く含む 金雲母を含む				
		19-63								
		11-64	把手		浅黄褐色 (7.5YR8/6)	やや密 3mm以下の砂粒 を多く含む 金雲母を含む				上部に切 り込み
		19-64								
		11-65	把手		にぶい 黄褐色 (10YR7/4)	やや密 3mm以下の砂粒 を多く含む 金雲母を含む				
		19-65								
		11-66	把手		にぶい 黄褐色 (10YR7/4)	やや密 3mm以下の砂粒 を多く含む 金雲母を含む				
		19-66								

遺構名	種類	押抜番号 國版番号	器形	注量(cm) 口 横 高 総 [推定] [残高]	色調	胎土 素質 砂粒	調整・手法		残存度	備考
							外面	内面		
旧河川	土師器	11-67	把手		浅黄褐色 (10YR8/4)	やや密 3mm以下の砂粒 を多量に含む 金星斑を含む				
		19-67								
		11-68	移動式底	(15.1)	灰黃色 (2.5Y7/2)	粗 2mm以下の砂粒 を多量に含む	ナデ	ナデ	小片	内外面に 煤付着
	移動式底	19-68								
		11-69		(12.2)	浅黄褐色 (10YR8/3)	粗 2mm以下の砂粒 を多量に含む	タテハケ	ヨコハケ	小片	
	青白器	19-69								
		12-70	小壺蓋	3.9	明綠灰色 (10GY8/1)	緻密		ナデ	ほぼ 完形	外面に施 輪印花並弁文
	青磁	20-70		1.2						
		12-71	碗	(3.2)	オリーブ 灰色 (10Y5/2)	緻密			小片	鍋蓮弁文
		20-71								
		12-72	碗	(3.6)	オリーブ 灰色 (2.5GY6/1)	緻密			小片	鍋蓮弁文
		20-72								
		12-73	碗	(3.7)	綠灰色 (7.5GY6/1)	緻密			小片	蓮弁文
		20-73								
		12-74	碗	(3.5)	オリーブ 灰色 (10Y5/2)	緻密			小片	割文
		20-74								
	12-75	20-75	碗	(1.6) [5.2]	綠灰色 (7.5GY6/1)	緻密		高台部 $\frac{1}{3}$	削り出し 高台	
	12-76	20-76	碗	(2.2) [5.8]	オリーブ 灰色 (10Y6/2)	緻密		高台部 $\frac{1}{4}$	削り出し 高台	
	12-77	20-77	皿	[9.0]	オリーブ 黄色 (5Y6/3)	緻密			$\frac{1}{4}$	

遺構名	種類	押印番号 図版番号	器形	法量(cm) 口 器 底 高 径 [規定] (現高)	色調	胎土質 素 砂 粒	調整・手法		残存度	備考
							外面	内面		
旧河川	青磁	12-78 20-78	皿	[10.0] 2.3 [4.2]	明オリーブ 灰色 (2.5Y7/1)	緻密			1/5	同安窯系 標記文
	白磁	12-79 21-79	碗	[13.3] (3.2)	灰白色 (7.5Y7/2)	緻密			口縁 1/8	玉縁状 口縁
		12-80 21-80	碗	[14.0] (3.6)	灰白色 (7.5Y7/2)	緻密			口縁 1/8	玉縁状 口縁
		12-81 21-81	碗	[17.2] (2.6)	淡黄色 (5Y8/3)	緻密			口縁 1/6	下縁状 口縁
		12-82 21-82	碗	[15.8] (3.1)	灰白色 (10Y8/1)	緻密			口縁 1/6	玉縁状 口縁
		12-83 21-83	碗	[18.2] (2.8)	灰白色 (7.5Y7/1)	緻密			口縁 1/8	罐反状 口縁
		12-84 21-84	小皿	(0.8) [5.9]	灰白色 (7.5Y7/2)	緻密			底部 3/2	
		12-85 21-85	小皿	(1.0) [7.2]	灰白色 (7.5Y7/1)	緻密			底部 1/4	
		12-86 21-86	碗	(2.3) [6.9]	灰白色 (10Y8/1)	緻密			高台部 1/4	削り出し 高台
		12-87 21-87	碗	(2.3) [6.0]	淡黄色 (5Y8/3)	緻密			高台部 1/4	削り出し 高台
		12-88 21-88	碗	(2.7) [6.6]	灰白色 (5Y8/2)	緻密			高台部 1/3	削り出し 高台

造構名	種類	持國番号 圓版番号	器形	法量(cm) 口 横 高 総 度 [推定] [残高]	色調	胎土 素 砂 粒	調整・手法		残存度	備考
							外面	内面		
旧河川	白磁	12-89 21-89	碗	(2.0) [6.2]	灰白色 (7.5Y7/2)	緻密			高台部 $\frac{1}{4}$	削り出し 高台
		12-90 21-90	碗	(3.0) [7.2]	灰白色 (10Y8/1)	緻密			高台部 $\frac{1}{4}$	削り出し 高台
		12-91 21-91	碗	(2.7) [6.4]	灰白色 (10Y8/1)	緻密			高台部 $\frac{1}{4}$	削り出し 高台
		12-92 21-92	碗	(3.3) [7.2]	灰白色 (2.5GY8/1)	緻密			高台部 $\frac{1}{4}$	削り出し 高台
	綠釉陶器	12-93 20-93	椀	(1.7) [6.0]	オリーブ 灰色 (10Y4/2)	緻密			高台部 $\frac{1}{4}$	有段輪 高台
		17-108 24-108	皿	[8.0] (1.2)	にじい 黄橙色 (10YR7/4)	緻密 1mm以下の砂粒 金雲母を含む	口:ヨコナデ 底:ナデ	口:ヨコナデ 底:ナデ	$\frac{3}{4}$	内面底部 赤変
		17-109 24-109	皿	7.8 1.5	浅黄橙色 (10YR8/4)	緻密 1mm以下の砂粒 を若干含む	口:ヨコナデ 底:ナデ	口:ヨコナデ 底:ナデ	完形	
		17-110 24-110	皿	[8.1] 1.2	浅黄橙色 (10YR8/4)	緻密 1mm以下の砂粒 金雲母を含む	口:ヨコナデ 底:ナデ	口:ヨコナデ 底:ナデ	$\frac{1}{2}$	
溝	土師器	17-111 24-111	皿	[9.4] 1.9	浅黄橙色 (7.5YR8/6)	やや密 1mm以下の砂粒 金雲母を含む	口:ヨコナデ 底:ナデ	口:ヨコナデ 底:ナデ	$\frac{1}{2}$	
		17-112 24-112	皿	[11.2] (2.2)	浅黄橙色 (10YR8/4)	緻密 1mm以下の砂粒 金雲母を含む	口:ヨコナデ 底:ナデ 指痕底	口:ヨコナデ 底:ナデ	$\frac{1}{4}$	
		17-113 24-113	皿	[11.6] (2.9)	浅黄橙色 (10YR8/4)	やや緻密 1mm以下の砂粒 を若干含む	口:ヨコナデ 底:ナデ	口:ヨコナデ 底:ナデ	$\frac{1}{4}$	

造 構 名 類	種 類	播 國 番 号 國版 番号	器 形	法 度(cm) 口 高 底 [推定] [残高]	色 調	胎 土 素 質 砂 粒	調整・手法		残 存 度	備 考
							外 面	内 面		
溝 須 惠 器	土 器	17-114 24-114	皿	[13.6] 2.3	浅黄褐色 (10YR8/4)	緻密 1mm以下の砂粒 を含む	口:ヨコナデ 底:ナデ	口:ヨコナデ 底:ナデ	1/4	
	須 惠 器	17-115 24-115	皿	(9.2)	灰色 (N6/)	緻密 1mm以下の砂粒 を含む	体:ナデ			外面底部 にヘラ記 号
	瓦 器	17-116 24-116	皿	[9.7] 2.2	灰白色 (N8/)	緻密 1mm以下の砂粒 を若干含む	口:ヨコナデ 底:ナデ	口:ヨコナデ 底:ナデ	1/2	ジグザグ 状暗文
	瓦 器	17-117 24-117	皿	[9.4] 2.0	灰白色 (N7/)	緻密 1mm以下の砂粒 を若干含む	口:ヨコナデ 底:ナデ	口:ヨコナデ 底:ナデ	3/4	ジグザグ 状暗文
	瓦 器	17-118 24-118	皿	[9.4] 1.8	灰色 (5Y4/1)	緻密 1mm以下の砂粒 を若干含む	口:ヨコナデ 底:ナデ	口:ヨコナデ 底:ナデ	3/4	ジグザグ 状暗文
	楕	17-119 25-119	楕	[14.2] 4.8 [5.5]	灰色 (N5/)	緻密	口:ヨコナデ 体:ナデ 底:ヘラミガキ	口:ヨコナデ 体:ナデ 底:ヘラミガキ	1/4	連結輪状 暗文
	楕	17-120 25-120	楕	[14.6] 5.2 [5.4]	灰色 (N5/)	緻密 ナデ	口:ヨコナデ 体:ナデ 底:ヘラミガキ	口:ヨコナデ 体:ナデ 底:ヘラミガキ	1/4	連結輪状 暗文
	楕	17-121 25-121	楕	3.5 [6.0]	灰色 (N5/)	緻密		底:ヘラミガキ	1/5	ジグザグ 状暗文
	楕	17-122 25-122	楕	[15.1] 4.2 [4.9]	灰色 (N4/)	緻密	口:ヨコナデ 体:ナデ	口:ヨコナデ 体:ナデ 底:ヘラミガキ	1/4	同心円状 暗文
	楕	17-123 25-123	楕	[14.6] 4.3 4.6	灰色 (N6/)	緻密	口:ヨコナデ 体:ナデ	口:ヨコナデ 体:ナデ 底:やや濃 ヘラミガキ	1/3	同心円状 暗文
	楕	17-124 25-124	楕	[12.0] 7.1 [5.4]	灰白色 (5Y7/1)	緻密	口:ヨコナデ 体:ナデ 底:ヘラミガキ	口:ヨコナデ 体:ナデ 底:ヘラミガキ	1/4	連結輪状 暗文

造構名	種類	持國番号 國版番号	器形	法量(cm) 口 盤 器 底 [推定] [残高]	色調	胎土 素 砂 質 粒	調整・手法		残存度	備考
							外 面	内 面		
溝	青磁	18-125 25-125	合子身	[7.2] 1.9 [6.4]	明綠灰色 (7.5GY7/1)	緻密			1/3	底部に回転系切り痕
		18-126 25-126	碗	(1.8) [5.0]	灰オリーブ色 (7.5Y5/3)	緻密			高台部 3/4	削り出し 高台
		18-127 25-127	碗	[16.0] (2.7)	灰白色 (7.5Y7/2)	緻密			口縁 1/8	玉縁状 口縁
		18-128 25-128	碗	[16.0] (2.4)	灰白色 (7.5Y8/2)	緻密			口縁 1/8	玉縁状 口縁
		18-129 25-129	碗	[16.4] (2.3)	灰白色 (7.5Y7/2)	緻密			口縁 1/6	玉縁状 口縁
		18-130 25-130	碗	(2.4) 6.0	灰白色 (7.5Y8/2)	緻密			高台部 完形	削り出し 高台
	瓦質土器	18-132 24-132	三足釜 脚部	(16.2)	黄灰色 (2.5Y4/1)	緻密 2mm以下の砂粒 を含む				
		18-133 24-133	三足釜 脚部	(13.0)	灰黃色 (2.5Y7/2)	緻密 2mm以下の砂粒 を含む				
	瓦器	18-136	椀	[15.0] (4.1)	灰色 (N5//)	緻密 1mm以下の砂粒 金雲母を若干含む	口:ヨコナデ 体:壺ヘラミガキ	口:ヨコナデ 体:壺ヘラミガキ	口縁 1/3	
	須恵器	18-137 26-137	練鉢	[29.8] (10.8)	灰白色 (N7//)	やや粗 小石、砂粒を含む	回転ナデ	ナデ	口縁 1/3	東播系
包含層	須恵器	18-138 26-138	甌	(13.5)	灰色 (N5//)	やや密 小石、砂粒を多く含む	体:回転ナデ 底:回転ヘラケヅリ	口:回転ナデ	口縁をのぞきはば 完形	外面底部 にヘラ記号

遺構名	種類	博団番号 図版番号	器形	重量(cm) 口 径 高 度 〔推定〕 〔残高〕	色調	胎土 素 質 砂 粒	調整・手法		残存度	備考
							外面	内面		
旧河川	石製品	12-94 21-94	有舌 尖頭器	長: [9.8] 巾: 2.7 厚: 0.9 重: 23.4 g					ほぼ 完形	サスカイ ト製
		12-95 21-95	不定形 刃器	長: 13.4 巾: 6.3 厚: 2.3					ほぼ 完形	サスカイ ト製
		12-96 21-96	滑石製 石鍋	[20.2] (4.6)					口縁 1/4	外面に煤 付着
		13-97 22-97	石錐	長: 3.3 巾: 1.4 厚: 0.7 重: 2.2 g					完形	サスカイ ト製
		13-98 22-98	打製 石錐	長: 2.1 巾: 1.4 厚: 0.2 重: 0.6 g					完形	サスカイ ト製
		18-134 26-134	砥石	長: (9.7) 巾: (4.8) 厚: (1.9)						
溝	石製品	18-135 26-135	砥石	長: (6.8) 巾: (3.0) 厚: (2.5)						
		18-139 26-139	砥石	長: (6.3) 巾: (4.6) 厚: (1.0)						
		18-140 26-140	砥石	長: (10.4) 巾: (8.0) 厚: (3.2)						
旧河川	石製品	18-99 22-99		外經: 2.4 内經: 1.9 重: 3.0 g					完形	『元並通寶』 行書体
	土製品	18-100 22-100	仏像	長: (3.9) 巾: (3.8) 厚: (1.0)	にじい青色 (7.5YR7/4)	緻密 1 mm以下の砂粒 金雲母を含む				製作り

遺構名	種類	押図番号 図版番号	器形	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	色調	焼成	胎土	備考
旧河川	瓦	15-103 23-103	平瓦	残 14.6	残 8.4	2.0	灰色 (N5/)	硬	やや粗 小石、砂 粒を多く 含む	表面：布目痕 裏面：格子目叩き
		15-104 23-104	平瓦	残 14.8	残 11.4	2.0	灰白色 (N7/)	硬	やや粗 小石、砂 粒を多く 含む	表面：布目痕 裏面：網目叩き
		15-106 23-106	平瓦	残 14.0	残 15.3	2.5	灰白色 (2.5Y7/1)	硬	やや粗 小石、砂 粒を多く 含む	表面：布目痕 裏面：網目叩き
		16-106 23-106	平瓦	残 12.3	残 13.0	2.1	灰色 (N5/)	硬	やや密 小石、砂 粒を含む	裏面：格子目叩き
		16-107 23-107	丸瓦	残 26.6	残 11.8	2.3	灰色 (N5/)	硬	やや粗 小石、砂 粒を多く 含む	裏面：布目痕
溝	瓦	18-131 26-131	軒平瓦	残 7.2		3.2 / 5.1	灰白色 (10YR7/2)	軟	やや粗 小石、砂 粒を多く 含む	均整唐京文 直線彫
		14-101 22-101	下駄	残 21.2	残 7.6	残 1.1 残 2.2 (歯高)				迷齒下駄
旧河川	木製品	14-102 22-102	下駄	残 21.3	残 4.5	残 1.2 残 0.9 (歯高)				迷齒下駄

図 版



1 北から



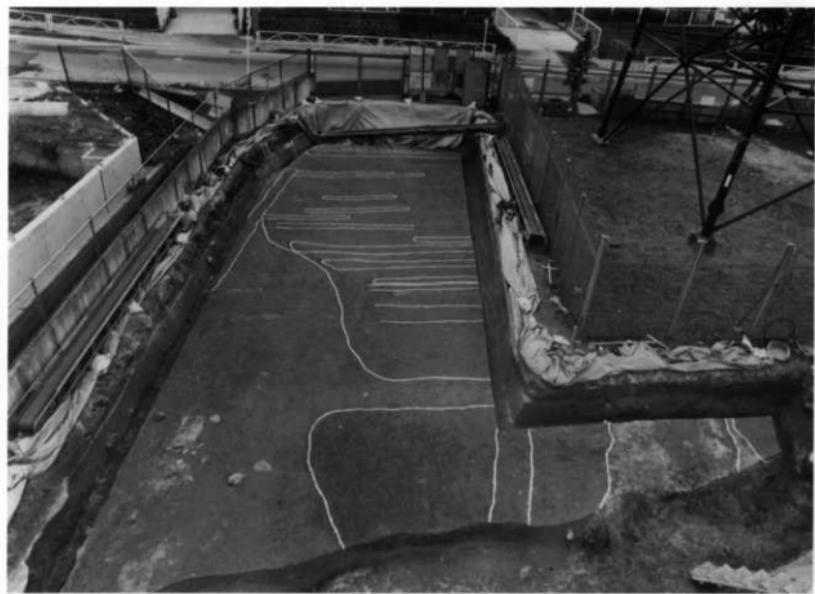
2 東から



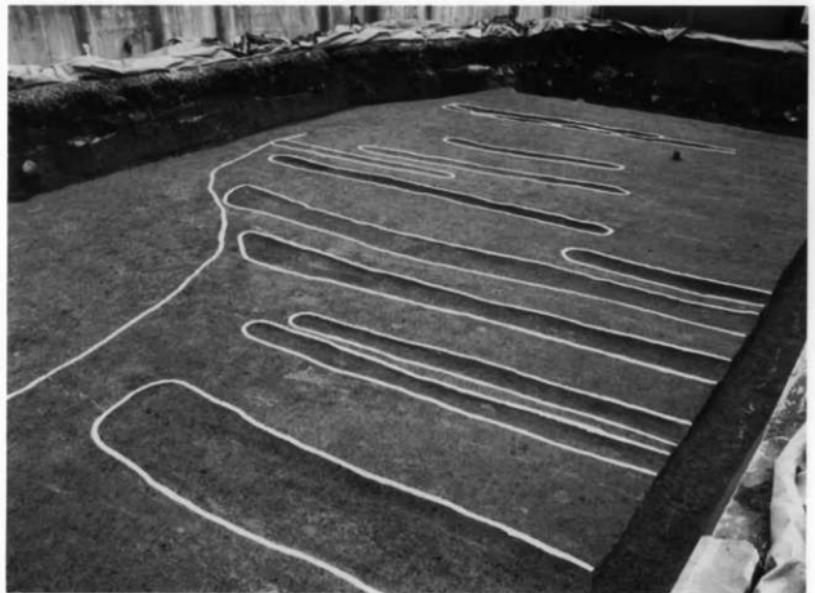
1 南から



2 北から



1 第1遺構面検出全景 (北から)



2 第1遺構面全景 (北西から)



1 第2遺構面検出全景 (南東から)



2 遺構検出 (南東から)



1 調査スナップ



2 遺跡全景空中写真

(東から)



遺跡全景空中写真 (真上から)



1 遺構全景
(北から)



2 遺構全景
(南西から)



溝全景 (北から)



1 溝 全 景 (南から)



2 土 坑 全 景



1 旧 河 川 全 景 (北東から)



2 旧 河 川 全 景 (南西から)



1 旧河川全景 (北西から)



2 旧河川全景 (北から)



1



4



2



5



3



6



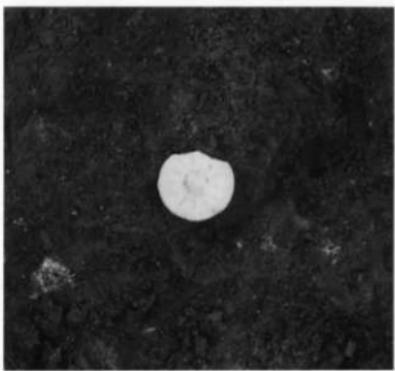
1



4



2



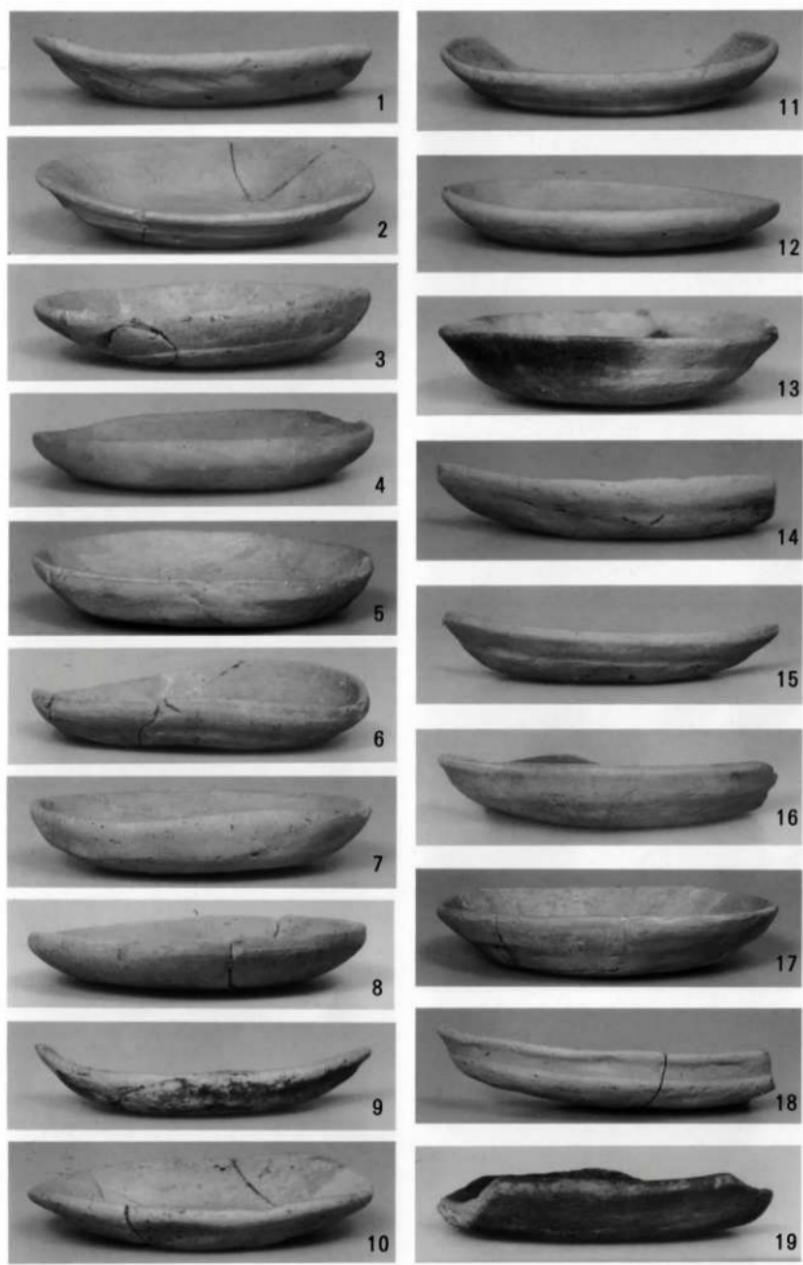
5



3

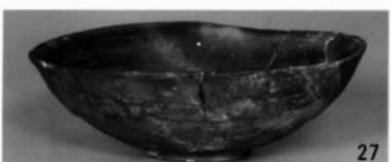


6





20



27



21



28



22



29



23



30



24



31



25



32



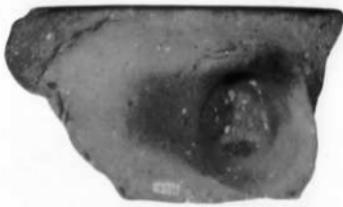
26



33



37



34



35



39



40



36



41



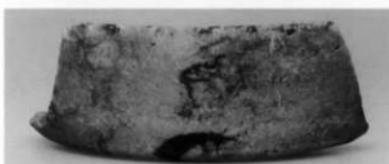
42



43



44



45



48



49



50



46



47



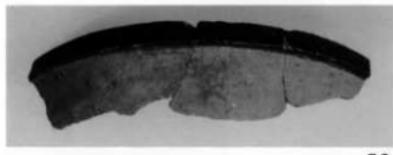
60



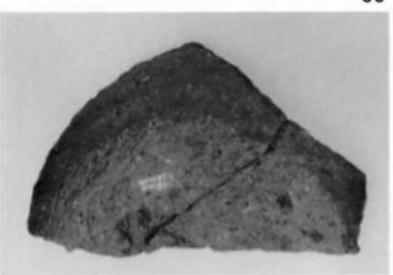
51



55



52



57



53



58



54



59



61



62



63



64



65



66



64'



67



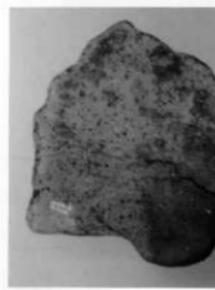
68



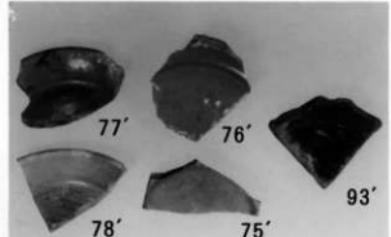
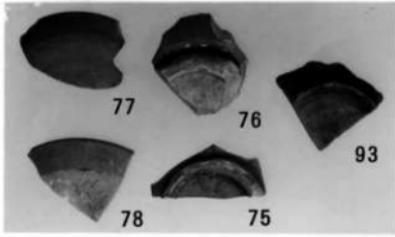
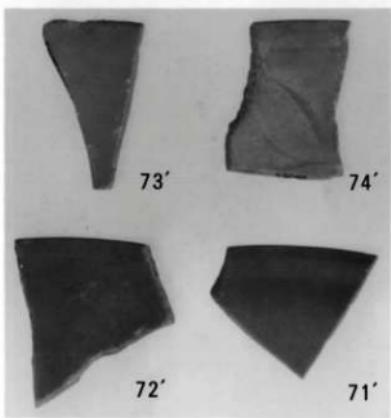
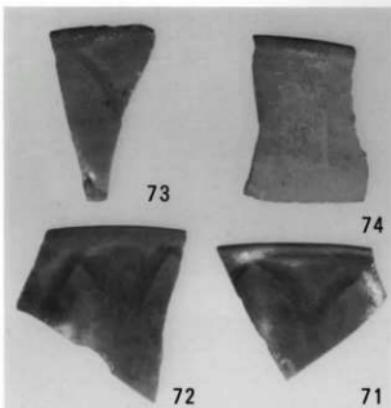
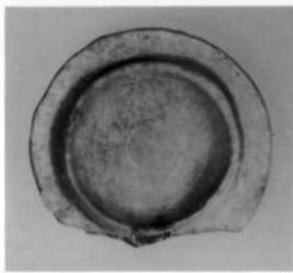
68'

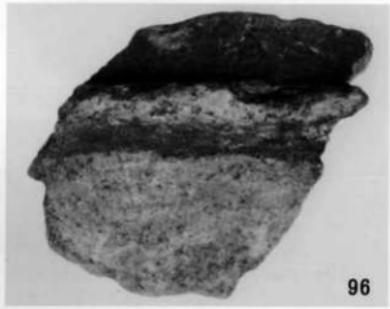
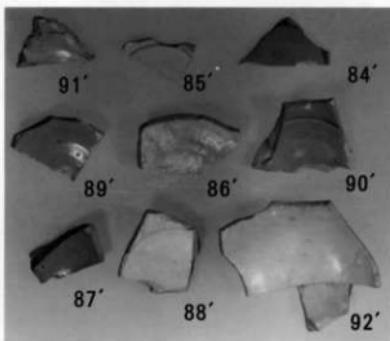
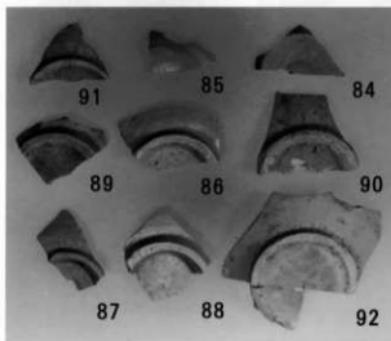
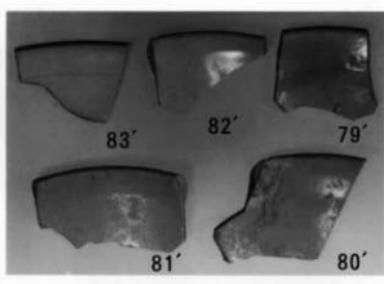
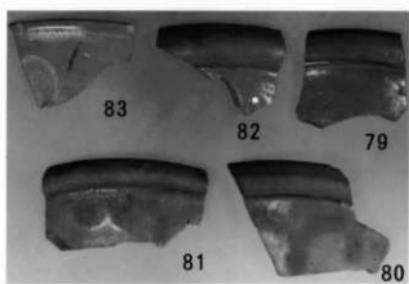


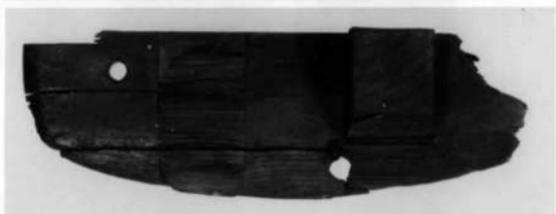
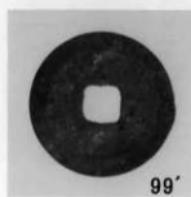
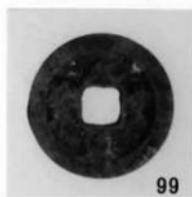
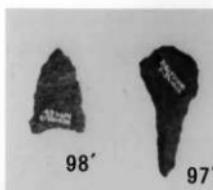
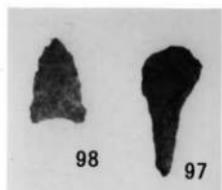
69



69'





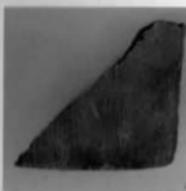




103



103'



105



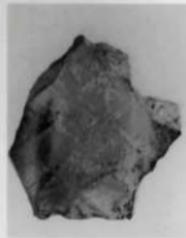
105'



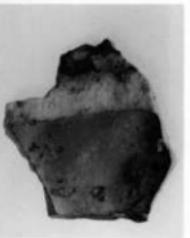
104



104'



106



106'



107



107'



108



109



110



111



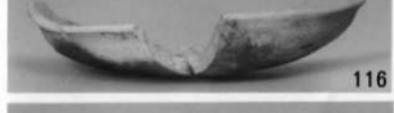
112



113



114



116



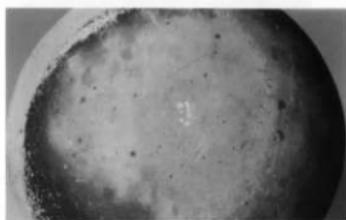
117



118



115



115'



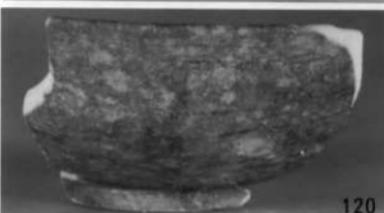
132



133



119



120



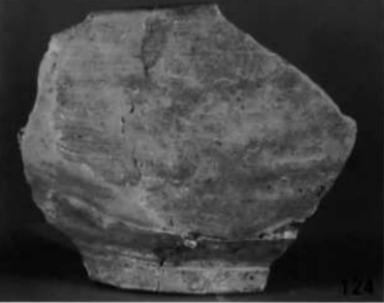
121



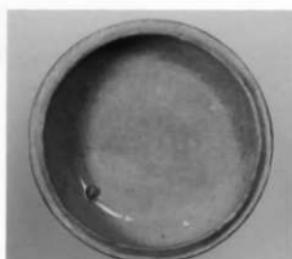
122



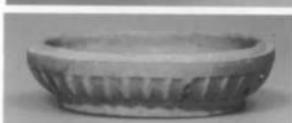
123



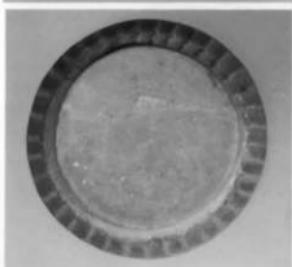
124



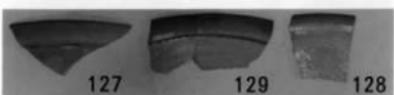
125'



125



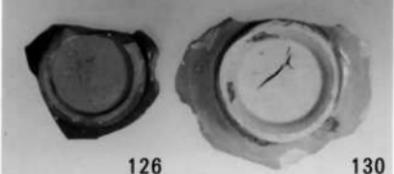
125"



127

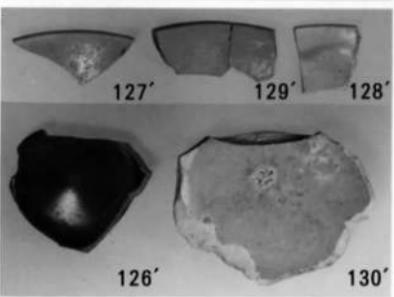
129

128



126

130



126'

129'

128'

126'

130'



131



138



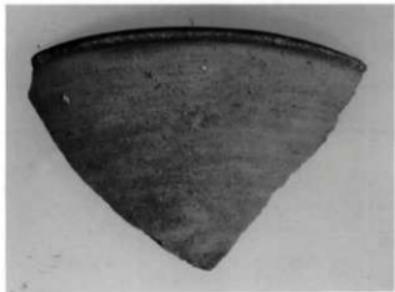
134



135



138'



137



139



140

報告書抄録

ふりがな	こまいけほっぽういせきはっくつちょうさかいようほうこくしょ
書名	木間池北方遺跡発掘調査概要報告書
副書名	主要地方道枚方・富田林・泉佐野線新設工事に伴う発掘調査概要報告書
シリーズ名	四條畷市埋蔵文化財調査報告
編著者	村上 始
編集機関	四條畷市教育委員会
所在地	〒575 大阪府四條畷市中野本町1番1号 TEL 0720-77-2121
発行年月日	1997(平成9年)年3月31日

ふりがな 遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査の原因
こまいけほっぽういせき 木間池北方 遺跡	じょうわいしづの 四條畷市 中野2丁目	272299	34° 44' 05"	135° 38' 57"	平成7・10 ・12～8・2 ・15	1072m ²	道路新設工事

遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
木間池北方 遺跡	集落跡	古墳時代 鎌倉時代	河川 溝 土坑	有舌尖頭器、瓦器、 青白磁、青磁、白磁 須恵器、土師器、瓦	

木間池北方遺跡発掘調査概要

平成9年3月発行

編集 四條畷市教育委員会

発行 四條畷市教育委員会
四條畷市中野本町1-1

印刷 加地企画印刷株式会社